

南あわじ市文化財調査報告書 第4集

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ

2007年度 埋蔵文化財調査

2011年3月

南あわじ市教育委員会



木戸原遺跡 7次調査 6区東半 全景（上が北東）



岸ノ上遺跡 3次調査 2・3区 全景 (左が北)

はじめに

南あわじ市では、暮らしやすく魅力ある地域づくりを行うため、『「食」はかくむ、ふれあい共生の都市』をめざすべき都市像・市民の生活像に掲げています。豊かな自然と食材に恵まれた淡路島は、古代においては天皇の御食料を献上した「御食国」のひとつであり、塩や海産物が都に納められていました。この海の幸・山の幸・里の幸に囲まれた暮らしは昔から変わらず、現代へと続いています。

近年の圏場整備事業を主とする大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査で、南あわじ市で生活していた過去の住人たちの遺したものが次々と確認されています。これらによって、昔の集落や人々の生活道具・交流関係などを知ることができ、徐々にではありますが地域の歴史も解明していきつつあります。

今回報告させていただきます平成19年度に実施した調査では、弥生時代～室町時代の遺跡があり、中には「御食国」と呼ばれていた頃の古代の遺跡も含まれています。岸ノ上遺跡や大野遺跡では都に送ったとされる塩を作るための土器が多く出土し、それらから当時の人々の暮らしの一部を垣間見ることができます。

刊行いたします年報は、調査概要という形で不十分さもあるとは思いますが、今後もさらなる努力により地域史の解明と本市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に、厚く感謝を申し上げます。

南あわじ市教育委員会

教育長 塚本圭右

例言

1. 本書は、南あわじ市教育委員会が2007（平成19）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘賢・定松佳重・的崎薫が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・筒井健司・富岡美早子・豊田亜希子・榎本早苗・三宅靖子・瀧崎真紀・濱本善美が行った。
4. 本書の編集は、的崎が行った。執筆・レイアウトは文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、多くの方々のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する（敬称略）。

伊藤宏幸・伊野近富・浦上雅史・岡田章一・岡本一秀・佐藤亜聖・中井淳史・橋本久和・百瀬正恒・森内秀造・森岡秀人・八峠興

目 次

巻頭写真図版

はじめに

例 言

第1章 埋蔵文化財事業の動向……………1

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図……………2

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1 久保ノカチ遺跡（3次調査）……………	4
2 木戸原（7次調査）・立石遺跡（2次調査）……………	7
3 岸ノ上遺跡（2次調査）……………	15
4 岸ノ上遺跡（3次調査）……………	16
5 久保ノカチ遺跡（4次調査）……………	24
6 下中原遺跡（6次調査）……………	27
7 久保ノカチ遺跡（5次調査）……………	30
8 九蔵遺跡（5次調査）……………	34
9 下中原遺跡（8次調査）……………	38
10 上久保遺跡（3次調査）……………	40
11 淡路国分寺跡（17次調査）……………	44
12 大野遺跡（2次調査）……………	48

第1章 埋蔵文化財事業の動向

平成19年度は、分布調査1件、立会調査1件、確認調査6件、本発掘調査8件の調査をそれぞれ行った。分布調査(20ha)・立会調査(62.6㎡)・確認(1,011㎡)・本発掘調査(11,494.9㎡)の合計発掘調査面積は12,568.04㎡で平成18年度の調査量(13,390.7㎡)と比べてやや減少となる。

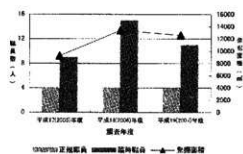
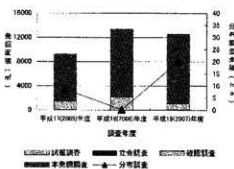
主な発掘調査は、これまで同様に圃場整備事業に伴う調査の割合が高く、県営圃場整備事業の大日川東地区(賀集福井)・市西地区(市三條～市福永)、団体営圃場整備事業の東津田地区(阿万東町)・伊賀野地区(北阿万伊賀野)・八幡地区(賀集八幡南)などで実施している。そのほかには野田牛内線の道路改良事業を行っている。

主な調査成果としては、市西地区(木戸原・立石遺跡)では弥生時代～中世の遺構・遺物、八幡地区(岸ノ上・大野遺跡)では官衙的要素の高い古代の建物群や遺物、大日川東地区(久保ノカチ遺跡)や伊賀野地区(下中原遺跡)では中世を中心とする集落を確認した。

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							正規	臨時
平成17(2005)年度	8.6	0.0	24.0	1,464.0	7,760.8	9,248.8	4	9
平成18(2006)年度	0.1	0.0	12.0	2,188.0	11,190.7	13,390.7	4	15
平成19(2007)年度	20.0	62.6	0.0	1,011.0	11,494.9	12,568.5	4	11

*単位:分布調査(ha)調査面積(㎡)臨時の職員数はその年度のべ人数

調査量と職員数の推移1

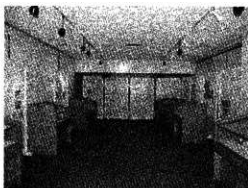


調査量と職員数の推移2

啓蒙普及活動としては、トライやるウィークで5月14日～18日に三原中学校の3名の生徒が、5月28日～6月1日は南淡中学校の2名の生徒が市内の遺跡見学や測量・発掘作業等を行った。発掘調査速報展「平成17・18年度調査」では、南淡図書館(1月19日～2月3日)・淡路人形浄瑠璃資料館(2月9日～24日)・西淡公民館(3月1日～9日)の3会場を巡回して展示を行った。(的崎)



トライやる作業風景

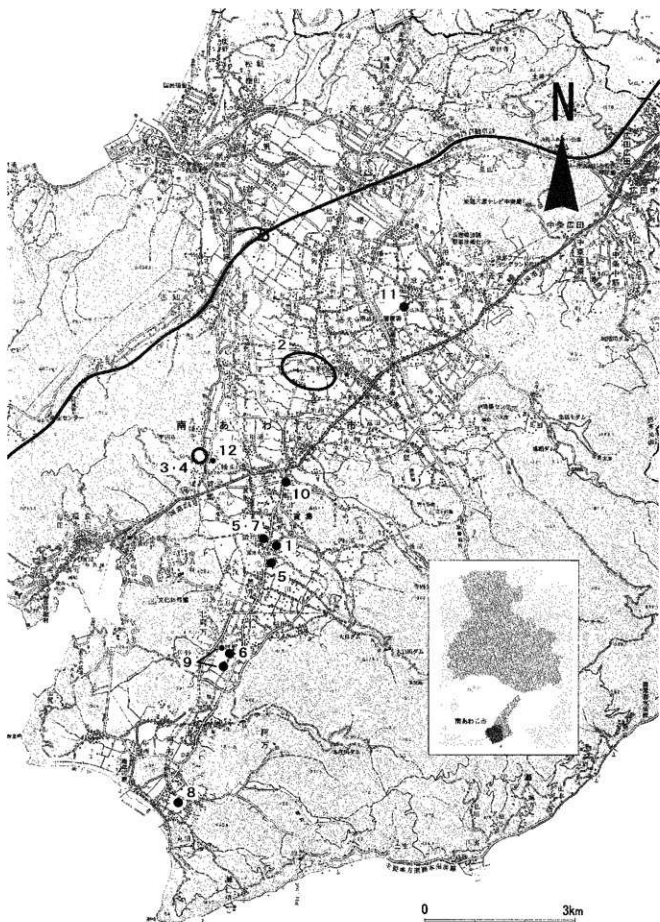


発掘調査速報展風景

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧表及び調査位置図

No.	事業名	所在1	所在2	内容	担当者	遺跡名	調査期間	成果概要
1	経営体育成基盤整備事業 (大日川東Ⅱ期地区7工区)	箕輪	福井	本発掘	坂口	久保ノカチ	H19.4.5～ 5.18	室町時代の基層確認
2	経営体育成基盤整備事業 (市西地区)	市	三條・福永	本発掘	定松	木戸原・立石	H19.5.14～ 10.23	弥生時代～中世の遺構を確認。木戸原では古銭が一括で32枚出土。立石は弥生時代後期の壺穴住居確認
3	基盤整備促進事業(八幡地区)	箕輪	八幡南	確認	坂口	岸ノ上	H19.5.4～7.3	古代～中世の遺構・遺物確認
4	基盤整備促進事業(八幡地区)	箕輪	八幡南	本発掘	坂口	岸ノ上	H19.5.4～ 10.24	古代の倉庫跡と中世の集落など確認
5	基盤整備促進事業(伊賀野地区)	北阿万	伊賀野	確認	的崎	下中原	H19.8.11～ 27	中世の遺構確認
6	経営体育成基盤整備事業 (大日川東Ⅱ期地区8・9工区)	北阿万・ 箕輪	福井・福井	確認	山崎	久保ノカチ	H19.8.20～ 7.6	中世の遺構・遺物確認
7	基盤整備促進事業(伊賀野地区)	北阿万	伊賀野	本発掘	的崎	下中原	H19.7.18～ 9.13	室町時代の遺構確認。竪立柱建物多数確認
8	経営体育成基盤整備事業 (大日川東Ⅱ期地区9工区)	箕輪	福井	本発掘	山崎	久保ノカチ	H19.7.31～ 11.6	中世の竪立柱建物確認、竪穴焼大衆敷点出土
9	基盤整備促進事業(伊賀野地区)	北阿万	伊賀野・佐野	確認	的崎	下中原	H19.10.10～ 24	中世の遺構確認
10	基盤整備促進事業(東沖田地区)	阿万	東町	確認	山崎	九蔵	H19.10.22～ 11.30	鎌倉期の遺構・遺物確認
11	基盤整備促進事業(八幡地区)	箕輪	八幡南	確認	定松	大野	H19.10.28～ 30	奈良・平安時代の遺構・遺物確認
12	基盤整備促進事業(伊賀野地区)	北阿万	伊賀野	本発掘	的崎	下中原	H19.11.7～ 12.14	室町時代の遺構確認
13	野田牛内線道路改良事業	箕輪	野田	本発掘	山崎	上久保	H19.11.20～ 20.1.5	中世の遺構確認
14	特定環境保全公共下水道事業	八木	園分	立企	坂口	浪路区分寺跡	H19.12.3～ 14	古代～中世の遺構・遺物確認
15	基盤整備促進事業(八幡地区)	箕輪	八幡南	本発掘	定松	大野	H19.12.10～ 20.1.18	奈良・平安・鎌倉時代の遺構・遺物確認。竪立柱建物を11棟確認。製塩土器が非常に多く、銅地や内面現も出土
16	経営体育成基盤整備事業 (漢里地区)	漢	里	分布	定松・ 的崎	里原田	H20.2.18～ 20	土師器・須恵器・陶磁器・石鏡・ワス Cairt 埋蔵



調査位置図

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1 久保ノカチ遺跡 - 3次調査 -

所在地	賀集福井字夫婦岸外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	坂口弘貴
種別	本発掘調査
調査期間	平成19年4月5日～5月18日
調査面積	545.1㎡



調査の位置

1 調査内容

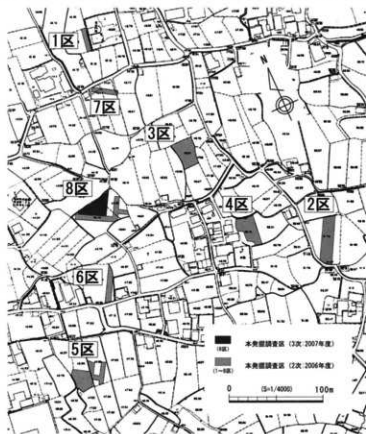
本調査は、賀集福井地区で計画されている県営園場整備事業に伴う本発掘調査である。

調査地である福井地区は、三原平野を構成する主要河川である大日川の上流左岸域に位置しており、現状の園場面の標高は45.42mを測る。調査は、昨年度1～8区の調査を進めてきたが、年度末に工事計画の変更により、8区の排水路部分北側に隣接する園場面の掘削を行うことになり、4月から急遽作業を行った。

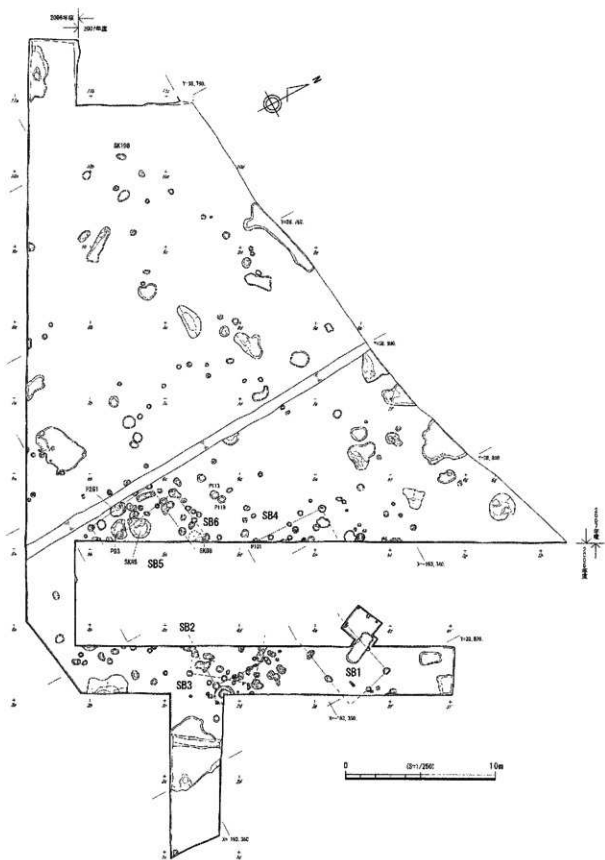
調査の結果、調査区内の土層堆積は調査区の南では耕作土と床土状のすぐ下層に、ベースとなる土壌が確認できる。ベースは北に向かって傾斜しており床土状の下にある中世頃の遺物を含む灰色系の土壌も北に向かって徐々に厚さを増すが、遺物量は少ない。ベースは黄色系の土壌で部分的に直径20cm前後の黒色～褐色系の礫を多量に含む土壌が堆積する部分があった。前者の黄色系の土壌が認められる部分では遺構の分布も比較的顕著で検出作業も容易であるが、後者の礫層が顕著な部分は遺構分布・出土遺物共に少なく、検出作業も困難であった。

遺構は全体で確認したが、東半部が中心となり、西半部に分布する遺構の大半は出土遺物がなく、土壌が黒く変化した様な状況で判然としない。主な遺構には掘立柱建物3棟(SB4～6)や土坑・小穴などがある。

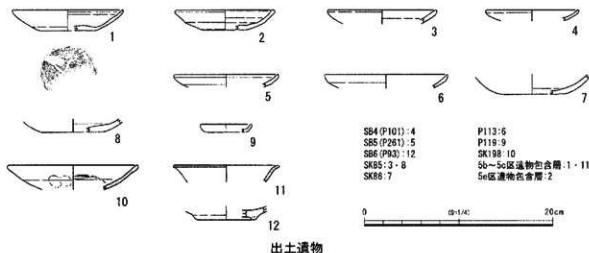
SB4は、南北2間(4.9m)以上×東西1間以上の規模で柱間が2.4～2.5mを測る。柱筋はN2°E方向となる。



調査区設定図



8区 平面图



SB 5は、SB 4の南に位置する南北2間 (4.75m) × 東西2間 (3.7m) 以上の規模で柱間が 1.8 ~ 2.45mを測る。南北方向の柱間が東西方向に比較して長い。南北の柱筋はN7.5° W方向となる。

SB 6は、SB 5と重複する形で位置する南北2間 (4.6m) 以上 × 東西1間 (2.4m) 以上の規模で柱間が 2.3~2.4mを測る。南北の柱筋はN11° W方向となる。

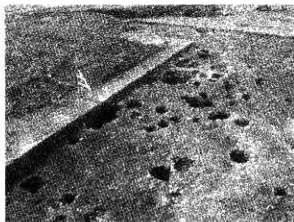
3棟の建物柱穴や周辺の遺構からは土師器皿や白磁 (11)、瀬戸・美濃系の皿 (12) などが出土しており、時期的には 15~16 世紀頃が中心と考えられる。

2 まとめ

本調査により中世頃の建物をはじめとする遺構・遺物を確認することができた。出土遺物は非常に少ないが、おおよそ室町時代後半 (15~16 世紀) 頃が中心と考えられる。3棟の建物については、いずれも全容は把握できないが、南北方向に主軸を有するもので構成される。2006 年度に行った隣接する調査区での成果を参考にすれば、建物や主要遺構は傾きから 2群に大別でき、室町時代の中で東に 30~40° 方向の傾きを有する一群から南北方向に主軸を有する一群に変化したものと思われる。 (坂口)



8区 全景 (北東より)



8区 5b~5c区周辺 (北西より)

2 本戸原遺跡 - 7次調査 - ・ 立石遺跡 - 2次調査 -

所在地 市三條～市福永字立石外
 事業名 経営体育成基盤整備事業
 担当者 定松佳重
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成19年5月14日～10月23日
 調査面積 2,936.5㎡

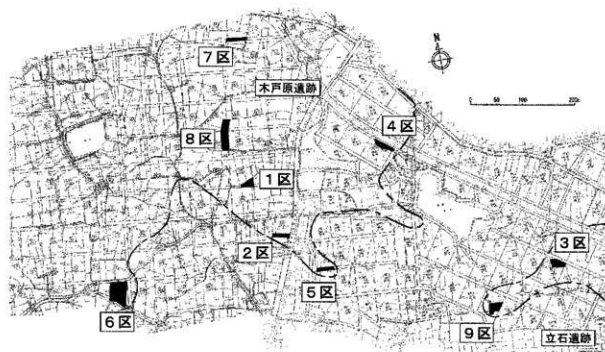


調査の位置

1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野中央部の標高16.7～29.7mを測る緩斜面に位置する。周辺には北西に弥生時代後期・中世の円座遺跡、南北朝時代の富永館跡・階出屋敷館跡、南には奈良時代の山惣麿寺、南西には弥生・奈良時代の線ヶ渚遺跡が立地する。また調査対象地域内を推定南海道が南北に走る。

以下、成果のあった調査区（9区が立石遺跡で、他の調査区が本戸原遺跡）のみ記述する。

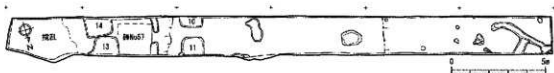


調査区設定図

【2区】（調査面積 57.4㎡）

調査区東部で1辺が1mを超える方形柱穴を4基（10・11・13・14）確認した。4基は規模・遺構埋土など似ているが、近接するため同一の構造物を構成するものではなく、柱穴10・14、柱穴11・13が併存していたと考えられる。この調査区は山惣麿寺の北200mにあり、寺院遺構の可能性も考えられたが、遺構埋土は堅固ではなく、礎石や版築は認められず寺院建築を支えるに足るものではない。しかし、遺

溝から出土した遺物は時代判定が困難な土師質土器小片のみであるが、おそらく奈良～平安時代の範疇に入ると思われるため、寺院に付随する建物の可能性はある。



2区 平面図

【6区】(調査面積 1162.0m²)

今回の調査では最多の遺構・遺物量の調査区で、掘立柱建物16棟や柱穴・溝・土坑を確認した。

建物1・2 建物1は土師質土器片のみの出土で時期判定が困難であるが、3次調査4区で確認した掘立柱建物群と規模が類似しており、古墳時代と思われる。それぞれに屋内棟持柱を持つ。

建物3 長径が1mを越す大型柱穴で柱痕が確認できないことから、柱穴の大型・乱れは柱の抜き取りのためと考えられる。建物東・北面に構もしくは塀の柱穴が並ぶ。

建物5・6・7 東・西面と南・北面途中までの変形四面庇を持つ建物6を母屋、建物5・7がそれに付属する建物と考えられる。

建物9・10 柱穴から焼土が多数出土したが、柱穴自体が2次焼成を受けた痕跡は確認できなかった。

土坑42 古銭32枚が出土した。結び目のあるわらが銭の穴の中に残っており、纏の状態であったことがわかる。隣接する土坑41でも古銭3枚がばらばらに遺構上面で出土しており、おそらく同じ纏の銭であったと思われる。最古銭は「唐國通寶」(初鑄959年、土坑41出土)、最新銭は「嘉徳通寶」(初鑄1208年)である。他に滑石製白玉が1点出土した。



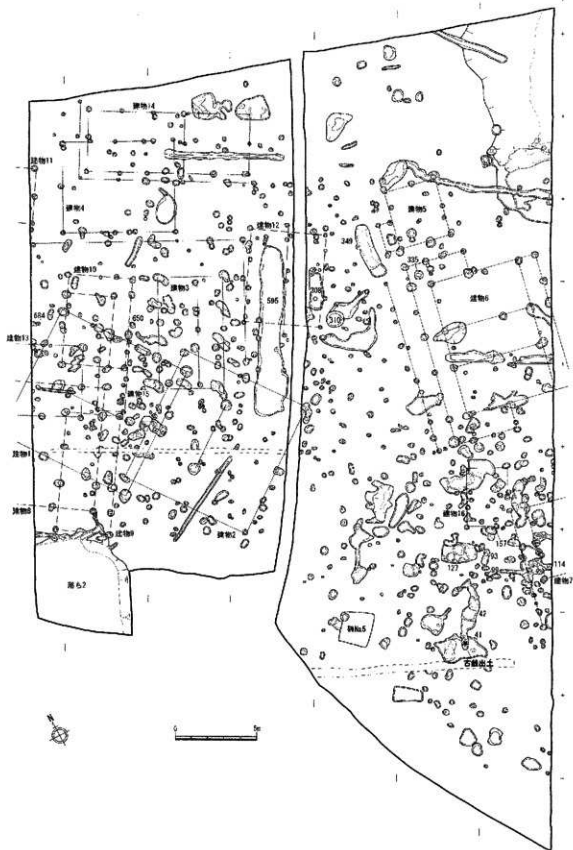
土坑42 古銭出土状況(北より)

土坑349 長辺1.7m、短辺0.45m、深さ0.42mを測る。湧水しており、最下層で板状の木や種(桃?)、わらのような植物の茎など植物遺体が残存していた。土器は東播系須恵器などが出土した。建物5に伴うと思われる。

土坑595 瓦器・瓦質土器・青磁・東播系須恵器などが出土した。流水や滞水は認められず、地山である暗灰黄色砂質土が2次堆積しており、掘削後しばらくそのまま放置されていたようである。建物3に伴うと思われる。

落ち2 中世の土器を含む。湧水が激しく、一部分で松葉がかたまっで残存していた。調査地周辺は「出湧」と呼ばれる湧水地点が多く存在し、落ち2もそのような場所であったと思われる。

建物の変遷は1→2→3・4→5・6・7→8→9・10・11・12となる。建物8より13世紀前半の石鍋が出土しており、周辺の出上遺物より建物5～8は鎌倉時代、9～12は室町時代と考えられる。建物13～16は出土土器では時期判定が困難であったため変遷には加えなかったが、中世以降の遺構と考える。



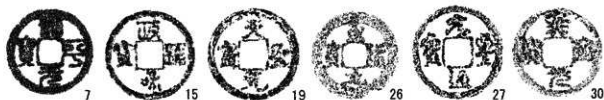
6区 平面图

	名称		初鋳年
1	元豊通寶	表	1078
2	元豊通寶	表	1078
3	政和通寶	裏	1111
4	元豊通寶	表	1078
5	開元通寶	裏	960
6	皇宋通寶	裏	1038
7	治平元寶	表	1064
8	皇宋通寶	裏	1038
9	至和元寶	裏	1054
10	大觀通寶	表	1107
11	嘉定通寶	表	1208
12	元符通寶	表	1098
13	至道元寶	表	995
14	嘉祐元寶	表	1056
15	政和通寶	裏	1111
16	元祐通寶	表	1086

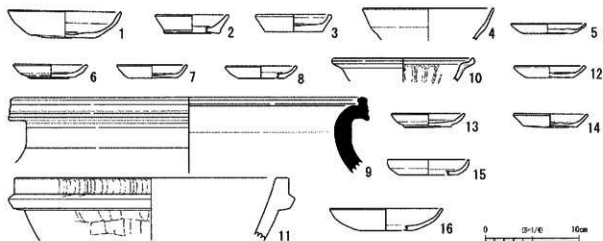
	名称		初鋳年
17	開元通寶	表	960
18	政和通寶	裏	1111
19	天聖元寶	表	1023
20	皇宋通寶	表	1038
21	熙寧元寶	裏	1068
22	開元通寶	表	960
23	嘉祐元寶	裏	1056
24	聖宋元寶	裏	1101
25	景祐元寶	表	1034
26	至道元寶	表	995
27	元豊通寶	裏	1078
28	元祐通寶	裏	1086
29	元祐通寶	裏	1086
30	熙寧元寶	裏	1068
31	皇宋通寶	裏	1038
32	元豊通寶	裏	1078

(出土時に上を向いていた面を“表”とした)

土坑42 出土古銭一覧

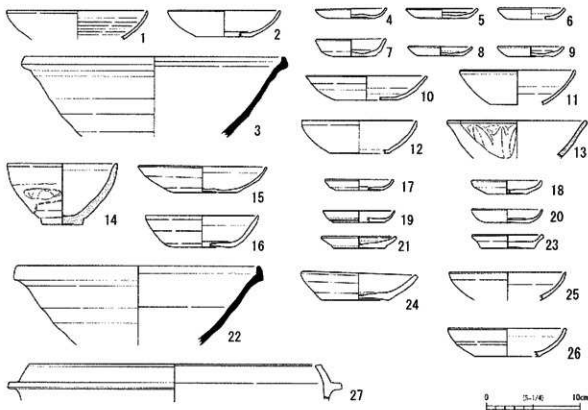


土坑42 出土古銭 (S=1/1 番号は一覧と一致する)



建物別出土土器

1~4. 建物3 5~8. 建物6 9~11. 建物8 12. 建物9 13・14. 建物14 15・16. 建物15



6区 遺構出土土器

- 1~7. 土坑41 8. 土坑93 9. 土坑114 10. 土坑99 11~14. 土坑127 15. 土坑157
 16. 土坑308 17・18. 土坑310 19・20. 土坑335 21・22. 土坑349 23~25. 土坑595
 26. 土坑684 27. 土坑650

【8区】（調査面積 662.7㎡）

溝と土坑・方形周溝墓を確認した。

溝12・13 土師質土器小片のみの出土であるが、上層の遺物包含層の遺物より、15世紀代の遺構と考えられる。

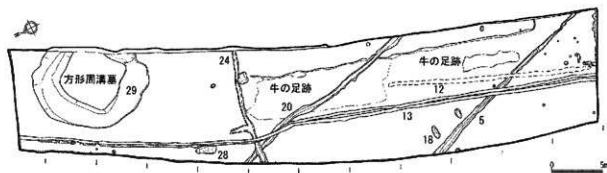
溝5・20・24 それぞれ土師質土器小片のみの出土である。溝5と20は遺構理士・形態から併存ではないと思われるが、先行関係は不明である。

方形周溝墓 遺体埋葬部である墳丘は削平されてなく、周溝（遺構29）も北西側は残存状況は悪い。南側の周溝より弥生時代中期の土器とともにチャート製の凹基式石甌（3）が出土した。しかし、須恵器片も共伴しており、上層からの混入の可能性がある。墳丘直上よりサヌカイト製の凹基式石甌（5）が出土した。これも同様に周溝墓に伴う遺物ではなく、上層遺物の可能性がある。

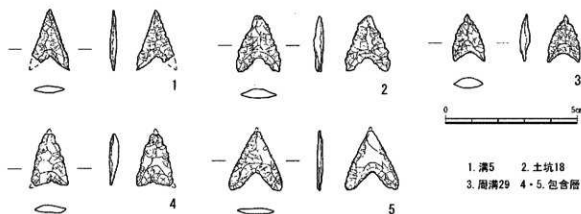
2ヶ所で牛の足跡を多数確認した。限られた範囲内に足跡が密にあるため、農耕に伴うものではなく小屋様のものがあつた可能性がある。時期は不明である。



8区 牛の足跡（北東より）



8区 平面図



8区 出土遺物

【9区】(調査面積 281.7㎡)

弥生時代後期の竪穴住居・掘立柱建物と中世の掘立柱建物・溝を確認した。

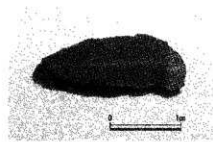
竪穴住居 直径約6m・5本柱で中央土坑を持つ。住居からは完形に近い土器が出土し、弥生時代後期中葉と考えられる。埋土上層より銅鐸の鍔部分が出土した。周溝は一部で検出したが明瞭ではない。

建物1 1間×2間で、弥生後期後半と思われる。

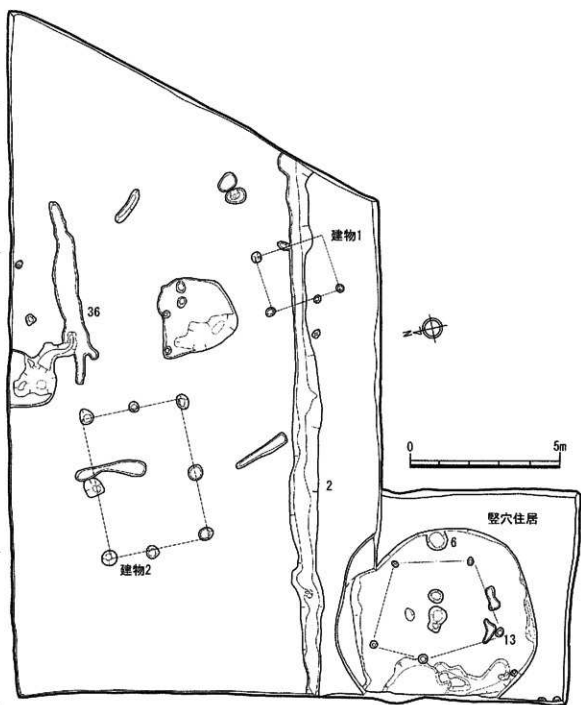
溝36 L字状に屈曲し、東西方向が浅く南北方向が深い。水流は認められなかった。後期中葉の弥生土器を多く含む。

建物2 2間×2間で柱穴からは弥生土器と思われる小片のみの出土であるが、プランなどから中世の遺構と考える。

溝2 中世と思われる須恵器片が出土し、既存農道の端とほぼ一致する。



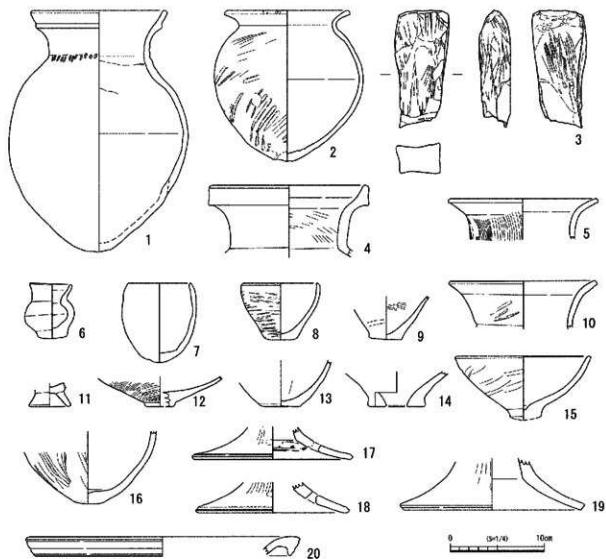
竪穴住居出土銅鐸



9区 平面図

2 まとめ

木戸原遺跡は弥生～室町時代の遺跡であり、今回の調査では遺構の分布は全体的に希薄であるが、鎌倉時代・室町時代の遺構が主となる。特に6区では中世集落における建物構成が建物5～7、建物9～12からわかる。また、輸入陶磁器である龍泉窯系青磁碗や瀬戸美濃天目茶碗など、一般的でない遺物の出土から有力者が所在したと思われる。遺物包含層からは須恵質の縄目タキの瓦片が出土しており、



9区 出土遺物

1~10. 竪穴住居上層 11~13. 竪穴住居下層 14・15. 住居内遺構6 16. 住居内遺構13 17~20. 遺構36

2区の方形柱穴を含めて淡路国分寺創建期と同時期と考えられている山慈庵寺との関連を考慮していかなければならない。

事業対象地での木戸原遺跡の発掘調査は本調査で終了となるが、これまでの調査から弥生時代中期・後期・古墳時代前期・中期・奈良時代・平安時代・中世の広範囲な複合遺跡とわかった。特に古墳時代には大和王権との強い関わりがあり、それらは前期古墳の不在に大きく関わってくる可能性も考えられる。

立石遺跡である9区では弥生時代後期と中世の遺構が確認でき、新たな集落の展開が今後期待できる。これまで南あわじ市内では、採集品はあるものの弥生時代の遺跡より銅銭は出土しておらず、今回出土したことで弥生時代における立石遺跡の存在は重要なものとなってくる。 (定松)

3 岸ノ上遺跡 - 2次調査-

所在地 賀集八幡南字岸ノ上外
 事業名 基盤整備促進事業
 担当者 坂口弘貴
 種別 確認調査
 調査期間 平成19年6月4日～7月3日
 調査面積 39㎡ (12ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

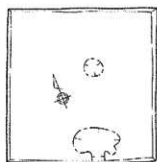
本調査は、賀集八幡南地区で計画されている団体営圃場整備事業に伴う確認調査である。

調査地は、三原平野西部の南辺寺山山裾から平野部にかけての標高 11.85～19.95mを測る水田からなる。調査は昨年度野菜の作付けで実施できなかった部分を対象にして進めていった。

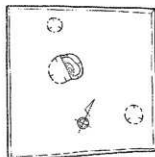
調査の結果、A地点については遺物が僅かに出土したのみで遺構は確認できなかった。またB地点のNo. 34調査区では古代、No. 35調査区では中世頃と思われる遺構をそれぞれ確認した。

2 まとめ

昨年度（1次調査）と本調査（2次調査）により、南辺寺山山裾のA地点は平安時代中頃、B地点は古墳時代から中世頃の遺跡が想定される。（坂口）

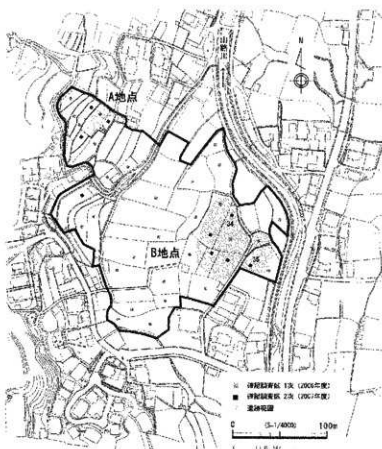


No. 34調査区



No. 35調査区 0 0.5 1m

調査区平面図



調査区設定図

4 岸ノ上遺跡 -3次調査-

所在地 賀集八幡南字岸ノ上外
 事業名 基盤整備促進事業
 担当者 坂口弘貴
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成19年6月4日～10月24日
 調査面積 2,462.6㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査は、賀集八幡南地区で計画されている団体営園場整備事業に伴う本発掘調査である。

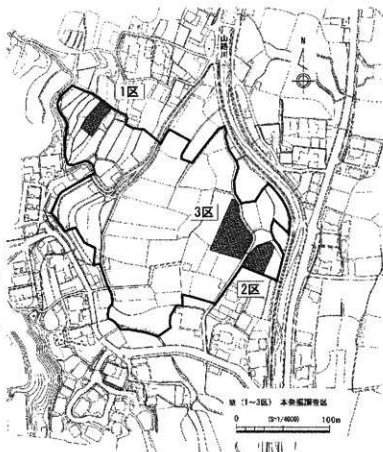
調査地は、三原平野西部の南边寺山山裾から平野部にかけての標高11.85～19.95mを測る水田からなり、先の調査成果より地下の遺跡に影響がおよぶ部分3ヶ所（1～3区）の調査を重機・人力併用で行った。

【1区】

南边寺山山裾に位置する調査区で、標高17.97mを測る。西側に向かって階段状に高くなる地形で、高低差がかなり大きい。調査区内のベースは、南边寺山の谷から流されてきた様な礫を含んだ黄色系の土壌となる。ベースの上には灰色系の砂質土が堆積しており、土師器・須恵器・黒色土器などの遺物が出土している。特に調査区中央東側部分が浅い落ち込み（SX32）になっており、その周辺からの出土が顕著であった。

遺構は調査区全体に分布するが、北と南端部分は浅く、明確に遺構になるか不明なものが多い。中央部を中心に遺構が多く認められるが、建物として復元はできていない。

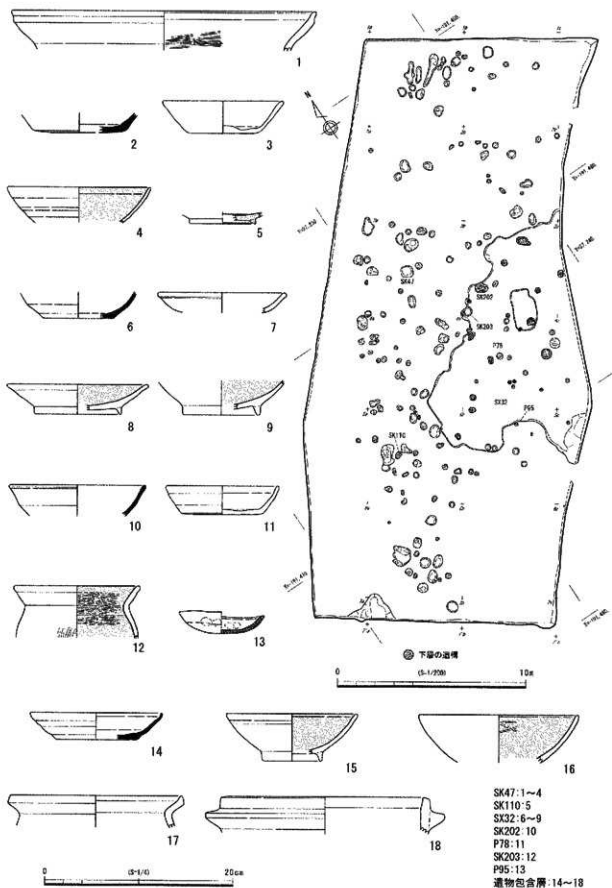
遺物はP95から瓦器小皿（13）が出土しているが、その他は土師器・黒色土器などが多く、9～10世紀頃が中心になるものと思われる。またSK110からは緑釉陶器の底部（5）が1点出土している。



調査区設定図

【2区】

山路川の西側に隣接する調査区で、



1区 平面図・出土遺物

標高 13.15mを測る。ほぼ中央部でベースの土壌が異なり、西側が黄色系粘質土で東側が礫を含んだ砂層となり、後者は山路川の氾濫原と考えられる。確認した主な遺構には、掘立柱建物が5棟・溝・土坑・小穴などがある。

弥生時代終末～古墳時代初頭 SD26は調査区中央を南北に走る溝で、幅0.7～1.7m、深さ約0.5mを測る。弥生時代終末～古墳時代初頭頃の遺物が出土している。

古代 掘立柱建物2棟（SB2・3）などがあり、いずれの建物も南北方向に主軸を持つ。

SB2は桁行2間（4.3～4.4m）×梁行2間（3.5～3.6m）の側柱建物である。いずれの柱穴も柱痕は確認できず、埋土中から7世紀前半～中頃の土器片が出土している。

SB3は桁行2間（3.5m）以上×梁行2間（2.4m）以上の建物で、南と西方向に伸びる可能性もある。柱穴から8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器・土師器・製塩土器が出土しており、SB2より新しいと思われる。

中世 掘立柱建物（SB1・4・5）などがある。

SB1は調査区北東部に位置する桁行5間（9.0m）×梁行2間（3.9m）の建物である。北側1間と南側2間分は庇と思われる補助的な柱穴と考えられる。

SB4・5は調査区南西部に位置する2間×3間の建物である。

いずれの建物も遺物が非常に少なく、SB1から土師器小片1点、SB4は周辺遺構から白磁碗などが出土しており、両建物は12世紀末～13世紀中頃と思われる。またSB5は周辺遺構から15世紀前半頃の土師器鍋が出土している。

【3区】

農道を挟んで2区の西にある調査区で、標高12.88mを測る。確認した主な遺構には、掘立柱建物14棟・溝・土坑・井戸・小穴などがあり、調査区を横断するSD47より北側を中心に遺構が分布する傾向がある。

弥生時代 調査区北端にあるSX6から前期と思われる壺口縁部(37)が出土している。

古墳時代 古墳時代の遺物が出土する遺構は少ないが、SD47やSK362などがある。

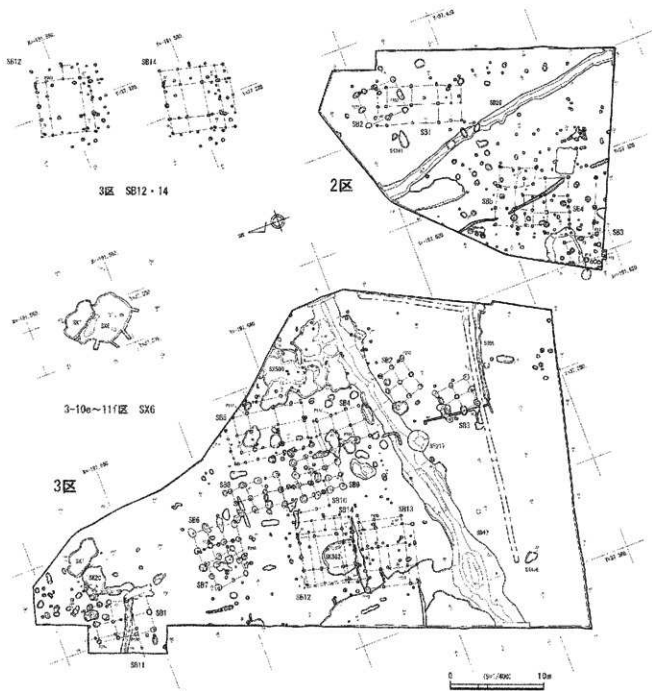
SD47は調査区中央を東西に横断する溝である。規模は幅2.0～5.0m、深さは西端の南北に少し膨らんだ部分で約1mとなる。遺物は西半部下層に古墳時代初頭頃の土師器が、東半部下層には古墳時代中頃の須恵器・土師器が多い。また滑石製の石製品が2点（剣形品1点・白玉1点）含まれる。上層には古代の遺物が含まれており中世には埋没していたものと思われる。

SK362は調査区中央西よりにある約3.5m四方の方形の土坑である。須恵器を模倣した土師器(50)など5世紀～6世紀末頃と思われる遺物が出土している。

古代 遺跡の中心となる時期でSX500や掘立柱建物を8棟（SB1・2・3・6・7・8・9・11）などを確認した。

SX500はSD47の北東部にある南北6.0m×東西7.0m×深さ0.5mあまりの落ち込みである。7世紀前半～中頃の土器がまとまって出土している。遺物の中には体部内面に同心円叩き技法が残る土師器甕(61)や移動式竈などが含まれる。

建物群は、調査区内中央を南北方向に配置されており、主軸が2区の古代の建物と同様に南北方向をとる。



2・3区 平面図

SB 1は調査区北方に位置する桁行3間(6.0m)×梁行2間(3.8m)の床束建物である。柱穴や東側にある土坑(SK20)などから奈良時代前半頃の土器が出土している。

SB 2・3はいずれもSD47の南側に位置する総柱建物である。SB 2が東西2間(3.5~3.7m)×南北2間(2.9~3.4m)、SB 3が南北2間(3.6m)×東西2間(3.0~3.2m)の規模でSB 2の柱掘方より須恵器坪G蓋(76)が出土している。SB 3は固化できる遺物はなく、根石を持つ柱穴が3穴ある。

SB 6・7は調査区北方に位置する。SB 6が桁行3間(4.5~4.6m)×梁行2間(3.8~3.9m)の総柱建物である。SB 7は桁行2間(3.3~3.4m)×梁行2間(2.9~3.0m)の側柱建物である。SB 6柱

穴より奈良時代前半頃の須恵器坏底部片(77)が出土しており、両建物は一部重複しSB7が古く7世紀前半～中頃と思われる。

SB8・9は、調査区中央に位置する。SB8は桁行3間(4.8～5.3m)×梁行2間(2.5～3.1m)、SB9はSB8の南にある桁行3間(4.4m)×梁行3間(4.0m)の総柱建物である。いずれも図化できる遺物がない。両建物は近接しているため同時併存は考えにくく、SB8の柱穴より須恵器坏G身の口縁部と思われる破片が出土しており7世紀前半～中頃、SB9が8世紀前半頃を考えている。ただし、SB8の柱穴から出土した須恵器坏G身は小破片であるため、8世紀前半頃まで年代がさがる可能性もある。

SB11は調査区北端に位置しており、SB1と一部重複する。南北2間(4.4m)以上×東西1間(2.2m)以上の規模で、柱穴より厚手の製土土器片が出土しており、SB1より新しいと思われる。

中世 掘立柱建物6棟(SB4・5・10・12・13・14)、井戸(SE217)や溝などがある。

SB5は桁行3間(7.3～7.5m)×梁行2間(3.9m)の総柱建物で北・西・東の三方に柵状の施設を持つ。その南と西にやや小さめのSB4・10が位置する。

SB12～14は調査区西部に位置する。いずれも3～4間、床面積30㎡程度の正方形に近い建物である。SB12には東側に出入り口と思われる1間分の張り出しが認められる。柱穴から瓦器塊など12世紀末～13世紀中頃の遺物が出土している。

SE217は調査区中央、中世の建物群の南に位置する素掘りの井戸である。SD47と切り合い関係にありSE217が新しい。規模は南北2.2m×東西2.4m×深さ1.15mで平面が円形をなす。遺物は須恵器こね鉢・瓦器塊・白磁などが出土しており、先の建物跡と同様の時期と思われる。

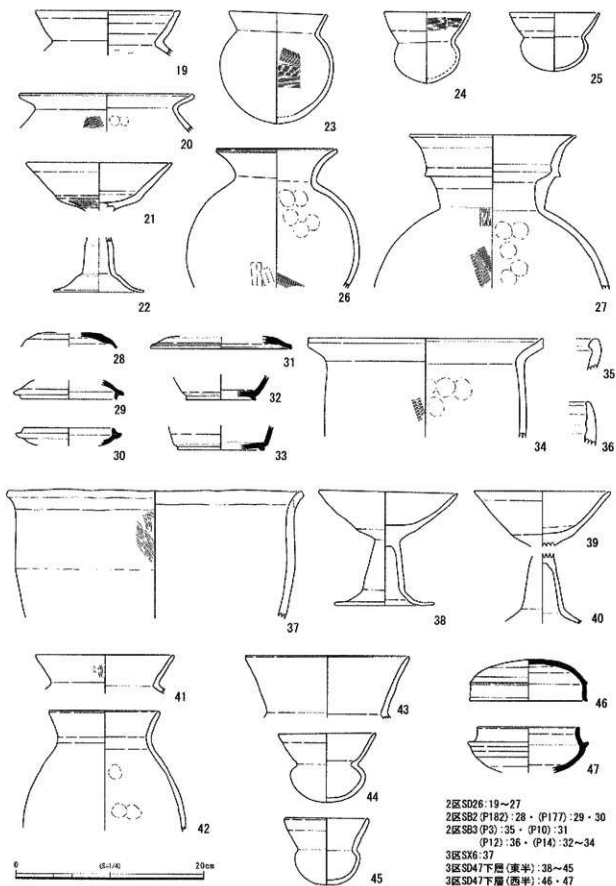
近世 これまでの時期と異なり、建物が認められなくなると同時に遺構数・遺物量が極端に減少する。SK476・SD99があり、後者の遺構から煙管(91)などが出土しており、18世紀後半～19世紀前半頃に位置付けできる。

2 まとめ

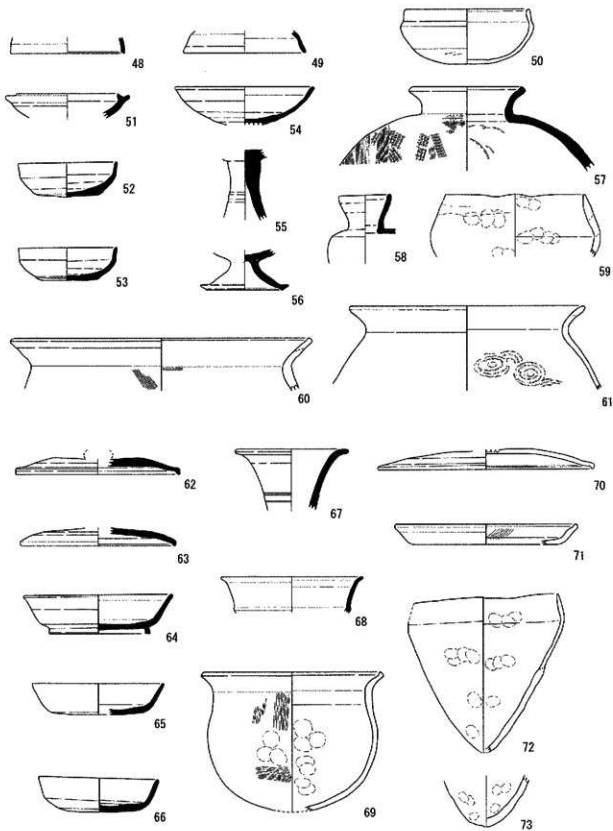
本調査により、弥生時代～近世までの遺構・遺物を確認することができた。

弥生時代～古墳時代にかけては、住居は確認できず、2区SD26や3区SD47といった溝などから遺物が出土している。遺物の出土量がある程度まとまっていることから、周辺に集落が広がるものと思われる。

古代は、2・3区の掘立柱建物群など遺跡の中心となる時期で、4時期(I期:7世紀前半～中頃、II期:8世紀前半頃、III期:8世紀末～9世紀初頭頃、IV期:9世紀後半～10世紀頃)の変遷が考えられる。I期の遺構には2区SB2・3区SB2・7・8・3区SX500、II期は3区SB1・3・6・9・3区SK20、III期は2区SB3・SK161・3区SB11、IV期は1区の遺構がそれぞれ該当するものと思われる。確認できた建物は、2・3区合わせて10棟の内、床東建物となる3区SB1も含めると6棟が総柱建物と非常に割合が高く、特にII期の建物は柱筋を意識する様に列状に配置されることが特徴となる。これとは対照的に山路川を挟んだ東岸に立地する奈良時代前半頃の大野遺跡は、側柱建物を中心に構成され、円面硯などの遺物が確認されている。遺跡の立地を考慮すれば、前者の岸ノ上遺跡が河川交通を利用した物資の保管施設、後者の大野遺跡が管理施設に位置付けでき、官衙的な遺跡として機能の分担が想定される。



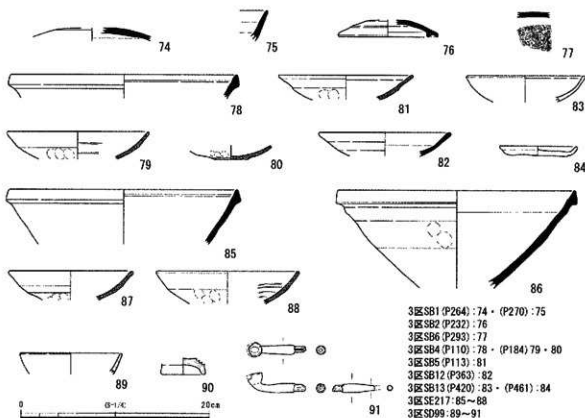
2 · 3区 出土遺物



0 20cm

3区SK362 48~50
 3区SK500 51~61
 3区SK20 62~73

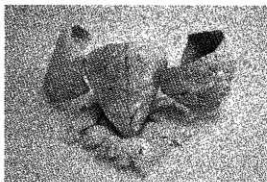
3区 出土遺物



3区 出土遺物

IV期とした9世紀後半～10世紀頃については、遺構・遺物が南辺寺山山裾の1区に限定され、建物跡など復元はできていないが、ほぼ同時期の創建と考えられる山頂にある南辺寺古堂跡との関連が想定される。

遺物については、須恵器・土師器を中心に製塩土器などが出土している。この内製塩土器については、淡路島の編年観に従えば『淡路島の古墳時代』淡路文化史料館1993)、丸底Ⅲ式がI期、丸底Ⅳ式がⅡ・Ⅲ期にそれぞれ該当し、IV期には島内では土器製塩は終焉していたと思われる。今回奈良時代前半としたⅡ期の3区SK20の遺構などを中心に、形体が砲弾型をなす丸底Ⅳ式(72・73)が出土しているが、おおよそ器壁が1cm未満で、



3区 SK20出土製塩土器(丸底Ⅳa式)

8世紀末～9世紀初頭頃のⅢ期とした2区の遺構などから出土した器壁が1cmを越すもの(35・36)とは細分が可能と思われ、ここでは前者の器壁が薄いものを丸底Ⅳa式、後者の器壁が厚いものをⅣb式とし、器壁の厚さは時期差を反映していると理解している。またⅡ・Ⅲ期の丸底Ⅳa・Ⅳb式の製塩土器には初焔が非常に多く含まれるのが特徴で、市内では三原平野西部の大日・山路川中流域に出土量が多い傾向にある。遺物全体の中での出土量の割合も高く、先の建物群との関係が注意される。

中世から近世については、12世紀末～13世紀中頃の建物・井戸跡と15世紀前半頃の建物跡など集落の一部を確認したと考えられる。その後近世にかけて遺構・遺物量が減少すると同時に溝などの遺構が中心となり、居住域から生産域へと変化が想定される。(坂口)

5 久保ノカチ遺跡 —4次調査—

所在地	賀集福川字有信外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	山崎裕司
種別	確認調査
調査期間	平成19年6月20日～7月6日
調査面積	約268㎡ (67ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

調査地は三原川を流れる主要河川の一つ、大日川の中～上流域に位置する。扇状地の末端近くに位置し、東南から北西方向に緩やかに傾斜する地形である。

大日川中流域には弥生時代中期の周溝墓等が検出された神子畷遺跡、上流域には弥生時代中～後期・中世の高萩遺跡、弥生時代終末期の弥つノ木遺跡がある。久保ノカチ遺跡は平成18年度の確認調査でその存在が明らかになった弥生・室町時代を中心とする遺跡である。

市道国衙阿万線の東側5.2haの範囲に26ヶ所、西側3.0haに41ヶ所の調査区を設定した。このうち西側の調査区No. 1・4・29の3ヶ所で埋蔵文化財の包蔵が確認できた。

No. 1 遺構面と遺物包含層を確認した。柱穴状の遺構を検出し、遺構3からは土師器片、包含層からは陶器・須恵器・土師器片等、中世の遺物が出土した。

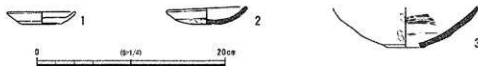
No. 4 遺構面を確認した。遺構面となる6層が遺構埋土と同じような土色であったため、平面での検出はできなかったが、断面で遺構を確認している。6層掘削時に中世の土師器小皿(1)が出土しており、遺構からの出土であった可能性が高い。

No. 29 土坑を検出した。No. 4と同様、6層上面が本来の検出面であるが、平面での遺構検出はできず検出は7層上面で行っている。6層の土坑範囲内と思われる場所から、13世紀代と思われる瓦器皿(2)と瓦器壺(3)が出土している。

2 まとめ

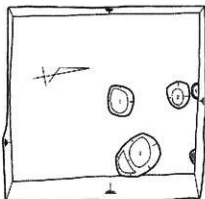
今回の調査区では弥生時代の遺構は確認できなかった。確認できた遺構・遺物は全て中世のものである。久保ノカチ遺跡は中世でも室町時代を中心とするが、今回の調査区では一部鎌倉時代に遡る遺構も分布するようである。

No. 4・29では上記のように本来の遺構面上の遺構検出が難しく、検出時には注意を要する。(山崎)



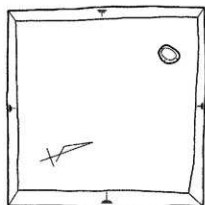
出土遺物 1.調査区No.4 2・3.調査区No.29

No. 1



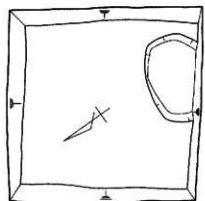
- 1 埴土
- 2 2.5Y5/4黄褐色砂質土 (厚り不均等、灰土)
- 3 2.5Y5/1黄灰色砂質土 (取込層、遺物含む)
- 4 2.5Y4/1黄灰色細砂質土 (灰化層少し含む、遺物含む)
- 5 10Y95/1緑灰色砂質土に7ブロック状に覆じる (濠埋埋土)
- 6 3と7覆じる
- 7 10Y95/6黄褐色砂質土 (地山)

No. 4



- 1 埴土
- 2 10Y95/8黄褐色砂質土 (床土)
- 3 10Y92/1黄褐色粘砂質土に2.5Y7/6黄褐色粘質土ブロック状に覆じる (濠埋埋土)
- 4 10Y94/1緑灰色細砂質土 (濠埋埋土)
- 5 10Y94/1緑灰色細砂質土に10Y92/1灰白色砂質土ブロック状に覆じる (濠埋埋土)
- 6 2.5Y4/1黄灰色砂質土
- 7 2.5Y5/4黄褐色砂質土 (10~20cm大の礫、地山)

No. 29



- 1 埴土
- 2 2.5Y5/4にぶい黄灰色砂質土 (厚り不均等少し含む、灰土)
- 3 10Y95/1緑灰色砂質土
- 4 10Y95/1緑灰色細砂質土 (取込層)
- 5 7.5Y94/1緑灰色細砂質土 (濠埋埋土)
- 6 7.5Y95/1緑灰色細砂質土
- 7 10Y92/8黄褐色砂質土 (地山)



調査区 平面・層序図

6 ^{しもなかほら} 下中原遺跡 — 6次調査 —

所在地 北阿万伊賀野字清水外
 事業名 基盤整備促進事業
 担当者 的崎 薫
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成19年7月18日～9月13日
 調査面積 1,322㎡



調査の位置

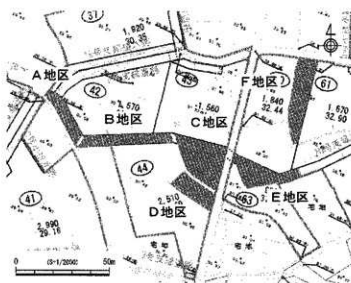
1 調査内容

調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野の最南端に位置し、標高30.0～32.8 mを測る緩斜面に立地する田圃地帯である。

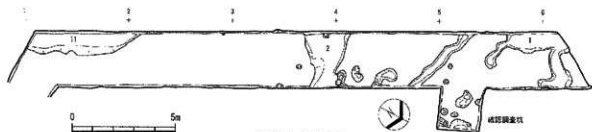
上記事業に伴って確認調査を行った結果、中世の遺構・遺物を確認したことから、事業施工によって遺跡に影響の及ぶ排水路部分と圃場面に関して記録保存を行うこととなった。調査はA～F地区に分けて行った。以下、主な調査区のみ記述する。

【A地区】

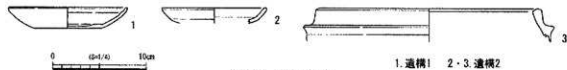
排水路部分の調査区で69㎡の調査を行った。遺構面は断面観察によって3面確認し、溝や土坑・柱穴を検出した。調査区の幅が狭いため、建物の有無は不明であるが、集落の中心部からはやや外れていると思われる。遺構1からは土師質土器(1)、遺構2からは土師質土器(2・3)・備前焼、遺構11からは土師質土器・備前焼・須恵器が出土している。時代は室町時代である。



調査区設定図



A地区 平面図



A地区 出土遺物

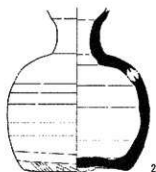
1. 遺構1 2・3. 遺構2

【E地区】

溝や土坑・柱穴・小穴などの遺構を僅かに確認したが建物の復元は不可能である。遺構から遺物は出土していないが、包含層から奈良時代の須恵器壺(2)や室町時代の備前焼播鉢(1)・土師質土器、江戸時代の陶器などが混在して出土している。



E地区 包含層 出土遺物



【F地区】

調査面の調査区で338㎡の調査を行い、掘立柱建物13棟・土坑・溝など室町時代後半の遺構を確認した。主な建物などの詳細を述べる。

建物2 梁行2間×桁行3間で建物3と方位を同じくする。柱間は1.7～2.9mで、桁行の中央部は2.9m、両端は1.7mである。柱穴から土師質土器皿(1～3)や青花皿(4)などが出土している。

建物8 梁行2間×桁行3間の総柱建物で、柱間は2.5～3.0mである。柱穴から土師質土器や須恵器が僅かに出土している。

建物9 2間×2間以上で、柱間は2.5～3.0mである。建物10・11と同じ方位をとり、周囲を櫓で囲まれている。柱穴は他の建物の柱穴より大きく、深い。土師質土器などが出土している。

建物10 梁行1間×桁行2間以上で柱間は2.5m～3.4mである。柱穴から土師質土器が僅かに出土している。西側にある溝(遺構7)は建物11と共有する区画溝の可能性はある。

建物11 梁行1間以上×桁行2間の底付き総柱建物と考えられ、柱間は2.3～3.1mである。遺物は僅かに土師質土器が出土している。

建物12 建物13と同じ方位を取り、梁行2間以上×桁行3間で、柱間は2.3m～3.5mである。柱穴から土師質土器皿(6・7)が出土している。建物と平行して北と西側に櫓列が並ぶ。

建物13 梁行2間×桁行2間の底付き総柱建物で、柱間は梁行が2.2m～2.8mである。梁行と桁行が垂直ではなく、やや菱形を呈する。柱穴から土師質土器皿(8～10)や青磁が出土している。

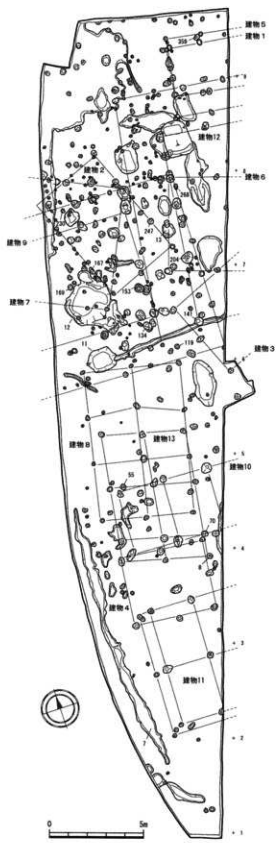
掘立柱建物は遺構の切り合いや方位、建物間の距離などから室町時代後半に4～5回の建て替えを行っていると考えられるが、遺物が少ないため建物1～8は前後関係が明確ではない。建物9～11はこの集落での最盛期と考えられ、中でも比較的規模が大きく櫓で囲まれている建物9は、中心的な建物であったと思われる。このあとに建物12・13が建て替えられたと考えられる。

遺構11・12 不定形的大型土坑である。遺構11は深さが35cmで、底はほぼ平らであるがその用途は不明である。遺構12は深さが50cmあり、これも底はほぼ平らである。下層埋土には炭が多く含まれているが、土坑には火を受けた痕跡は確認できない。須恵器・土師質土器・焼土塊が出土している。

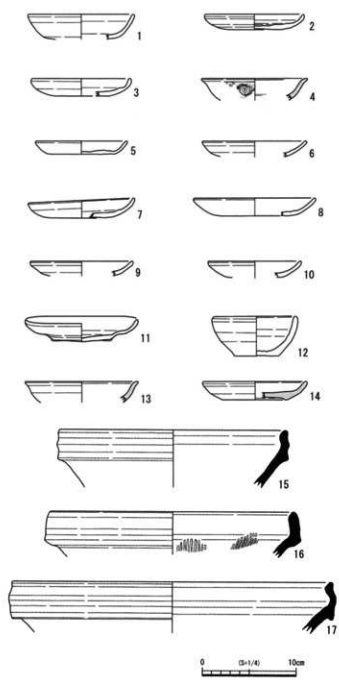
その他の遺構から瀬戸美濃系の施釉陶器(13・14)や備前焼播鉢(15～17)などが出土している。

2 まとめ

今回の調査で室町時代後半の集落を確認し、F地区では何度も建て替えが行われていることから、集落の中心地であったと考えられる。今までの調査成果から、下中原遺跡の初現は室町時代前半であり、この地域はそれ以降に集落として拓けていったと考えられる。(略)



F地区 平面図



- 1. 建物2 遺構167
- 2~4. 建物2 遺構247
- 5. 建物9横列 遺構268
- 6. 建物12 遺構141
- 7. 建物12 遺構204
- 8. 建物13 遺構8
- 9. 建物13 遺構70
- 10. 建物13 遺構76
- 11. 遺構119
- 12. 遺構169
- 13. 遺構55
- 14. 遺構359
- 15. 遺構13
- 16. 遺構134・153
- 17. 遺構230

F地区 出土遺物

7 久保ノカチ遺跡 — 5次調査 —

所在地	賀集福井字有信外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成19年7月31日～11月6日
調査面積	約1,495㎡



調査の位置

1 調査内容

調査地は三原川を流れる主要河川の一つ、大日川の中～上流域に位置する。扇状地の末端近くに位置し、東南から北西方向に緩やかに傾斜する地形である。

確認調査（4次調査）の結果に基づいて、1～4区で本発掘調査が行われることになった。

【1区】

約145㎡の調査区である。土坑等の遺構が検出できたが、北側の2区と比べると検出遺構は少なかった。

【2区】

約670㎡の調査区である。今回の調査区で最も検出遺構が多く、特に中央から南側にかけて遺構が密集していた。確認調査による推定範囲よりも、遺跡が東西に広がることがわかったため、工事の影響を受ける範囲について調査区の拡張を行った。主要な遺構について次に述べる。

遺構70・71 備前焼大甕を中心とした陶磁器片、東播系須恵器鉢や土師器皿等、礫にまじって大量の遺物が出土した土坑である。遺構70・71から出土した破片同士で接合可能なものがあった。備前焼大甕は4個体以上の破片がある、そのうち口径・体部最大径・器高のわかるものが1個体あり、約40・65・66cmを測り、口縁部は玉縁状を呈している。建物4・5柱穴をこれらの出土遺物が覆っていることから、これらの建物より後に土坑が掘られ、遺物が埋められたようである。

建物3 梁行1×桁行3間を母屋部分として西側1×2間を付設した4区の建物1・2と同じような構造の建物と思われる。総床面積は約21.9㎡である。

建物4 総柱の梁行2×桁行4間を母屋部分として、南側と北側に庇と思われる付属施設が見られる。総床面積は約56.6㎡で、復元建物中最も規模が大きい。

建物5 建物4の母屋部分の柱穴で南北に2つ柱痕が並ぶものが見られることから、建て替えが行われたと判断した。いくつかの柱穴で建物5が建物4の柱痕を切っていることが確認できた。建物4の西側の柱穴は柱痕が1つであることから、建物5の母屋部分は桁行の西1間分が少なく、梁行2×桁行3間と推定される。建物4同様、南側と北側に庇と思われる付属施設が見られるが、北側の付属施設はさらに建物西側へ回りこむ。総床面積は約45.2㎡と建物4よりやや規模が小さくなっている。

建物6 梁行2×桁行3間で、総床面積は約14.3㎡である。

建物7 梁行2×桁行3間で北側に庇と思われる付属施設が見られる。総床面積は約21.4㎡である。

建物8 梁行1×桁行3間で、総床面積は約12.3㎡である。

【3区】

排水路の設置に伴う約3×7mの小規模な調査区で、遺構や出土遺物は確認できなかった。

【4区】

約660m²の調査区である。2区ほどではないが中世の柱穴等の遺構が検出され、建物1・2が復元できた。建物1・2はほぼ同方向で、総床面積も32.2m²と32.4m²とほぼ同じであることから建て替えが行われたと推定される。建物1は梁行1×桁行3間を母屋部分として北側の1×2間が付属的な施設と推定される。建物2については南西側隅の柱穴が検出できなかったが、建物1と同じ構造で建て替えが行われたと推定される。

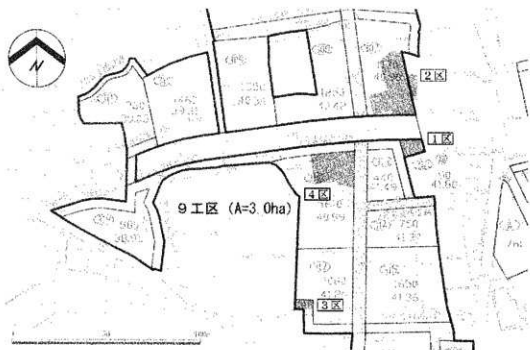
建物1・2の南側でほぼ直角に屈曲する溝を検出したが、建物1・2とほぼ同方位であることから敷地の区画等、建物と関わりをもつ可能性がある。溝の西側延長については耕地造成時に削平されている。

2 まとめ

1・2・4区で中世の遺構が検出できた。その中でも2区が遺跡の中心的な範囲と思われる。遺構の前後関係は建物4→遺構5→遺構70・71が切り合いから明らかになっている。他の建物については明らかではないが、方位から①建物4・5、②建物3・6・7、③建物8の3群に分類できる。建物6と建物4・5が重なりあっていることから①群と②群には時期差があると推定される。遺構70・71の出土遺物は比較的富裕な層の所持物と思われ、規模の大きな①群建物内で所持していたと考えるのが妥当と思われる。おそらく①群の廃絶後、②群の建物を建てるにあたって①群の廃棄物を埋めた土坑が遺構70・71ではないかと思われる。これらの遺構群の時期であるが、まとまった遺物が出土した遺構70・71を参考にとすると、およそ14～15世紀頃を中心とすると考えられる。

4区でも中世の建物1・2が復元できたが、上の①～③群とは全く違った方位を示しており、出土遺物も少なかったため、詳細な時期については今のところ不明である。

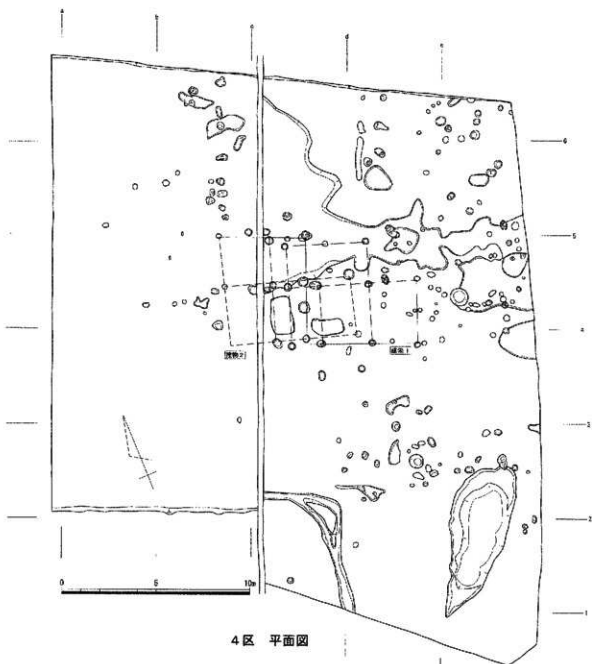
(山崎)



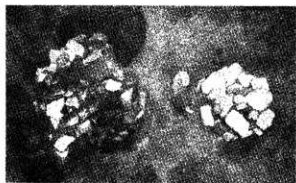
調査区設定図



2区 平面图



4区 平面図



2区 遺構70・71 遺物出土状況(南から)



2区 遺構70・71 出土遺物

8 九蔵遺跡 -5次調査-

所在地	阿方東町字中ノカイチ外
事業名	基盤整備促進事業
担当者	山崎裕司
種別	確認調査
調査期間	平成19年10月22日～11月30日
調査面積	約132㎡ (33ヶ所)



調査の位置

1 調査内容

調査地は南あわじ市の最南端、鴨路川によって形成された標高2～8mの低平な沖積地に位置する。鴨路川は現在、遺跡北側を北西の方向へ流れているが、昔は今回の調査地の西端付近を南西方向へ流れていたと伝えられる。調査地の北方向には弥生時代中期・平安時代～中世の北田遺跡、南東方向には古墳～平安時代のみこの遺跡が立地する。

当遺跡は平成15年度の分布調査により存在が明らかになり、平成17年度には兵庫県教育委員会の発掘調査により、鋳製の和同開珎の出土、官衙的な遺構が検出されるなど大きな成果があった。（『平成17年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2007）また当事業に伴って行った1～4次調査の結果、縄文時代晩期～中世の複合遺跡であることが明らかになっている。（『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』南あわじ市教育委員会2009、『同Ⅲ』同2010）

今回は遺跡でも最も海に近い範囲である。調査区No. 1・10・12・14・15・22・33で埋蔵文化財の包蔵を確認した。

- No. 1 丸底Ⅲ・Ⅳ式の律令期の製埴土器を含む遺物包含層を確認した。
- No. 10 飛鳥時代頃の須恵器坏G蓋と思われる破片(6)が出土しており、4層はNo.12の2層と対応する飛鳥～奈良時代の包含層と思われる。
- No. 12 2層から飛鳥～奈良時代頃の須恵器坏Bと思われる破片(9)等が出土した。柱穴状の遺構が検出された。
- No. 14 平面および断面で遺構が確認できた。遺構3からは律令期と思われる土師器片が出土している。遺物包含層は耕地造成時に削平されたようである。
- No. 15 遺構1から製埴土器と思われる細片が出土し、律令期と思われる。断面観察で2層も遺構であることがわかった。これまでの調査成果から中世の遺構埋土である可能性が高い。
- No. 22 床土の直下で遺構面でNo.14同様、包含層は削平されたようである。流路状の遺構1から弥生時代後～終末期頃と思われる高坏の脚部片(1)が出土している。
- No. 33 奈良時代頃の須恵器坏B蓋と思われる破片(7)等を含む遺物包含層を確認した。

2 まとめ

これまでの確認調査(1・3・5次)成果から、遺跡範囲はB(No.14・15・22・33)、D(No.10・12)、E(No.1)の3ヶ所に分けることができる。

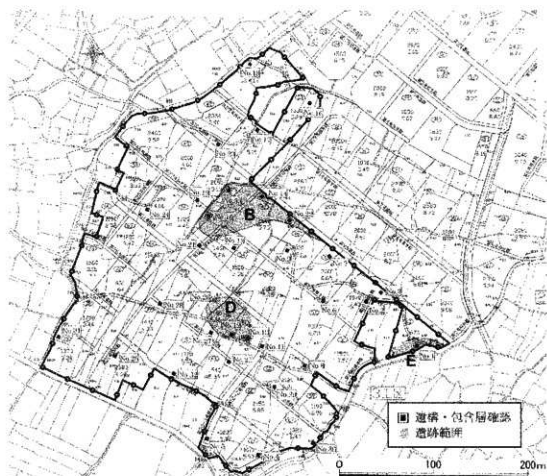
範囲Bは東から舌状に延びる微高地上に分布する弥生時代～中世の範囲である。上述の調査区もこ

の範囲に含まれ、九歳遺跡の中心的な場所と言える。No. 15・33の西側は高低差があり、段丘地形を踏襲する地形と思われる。今回の調査によってこの段丘地形がB地区の西端を画することがわかった。またNo. 15付近では遺構面が中世と律令期の2面に分かれている可能性がある。

範囲Dは飛鳥～奈良時代頃の遺跡が広がっていると推定される小規模な範囲である。この周囲には低湿地状あるいは水の影響を受けたような上壤堆積を示す調査区が多く、周囲よりやや小高い地形を呈する範囲D付近にのみ遺跡が立地できたと推定される。

範囲Eは調査区外に広がるため不明な点が多いが、この東側には山裾の微高地が広がり、先述したみのこし遺跡も立地している。条件の良い場所であるので、古墳～平安時代の大きな遺跡範囲になる可能性も考えられる。

(山崎)



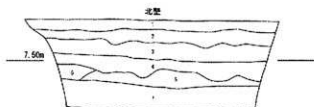
調査区設定図



出土遺物

1. No. 22 遺構 2・3. No. 1 堆積土上層 4. No. 1 堆積土下層 5・11. No. 15 堆積土上層
6. No. 10 3~4層 7・8・10. No. 33 堆積土上層 9. No. 12 2層

No. 1



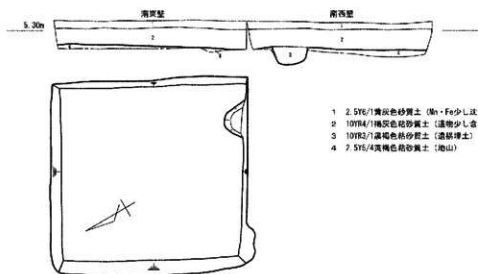
- 1 2.5Y7/4透黄褐色砂質土 (Fe少し沈着、灰土)
- 2 2.5Y5/1黄灰色粘砂質土 (Fe少し沈着)
- 3 10YR5/2灰黄褐色粘砂質土 (Fe沈着、炭少し含む)
- 4 10YR4/1褐色粘砂質土 (炭多く含む、炭物含む)
- 5 10YR4/1褐色粘砂質土 (炭含む、炭物多く含む)
- 6 10YR4/6褐色粘砂質土 (炭少し含む、炭物少し含む)
- 7 10YR5/1褐色粘砂質土

No. 10



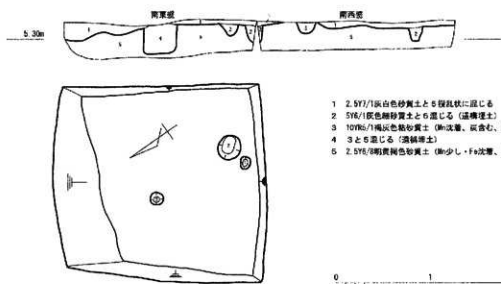
- 1 緑灰
- 2 2.5Y7/2灰黄色砂質土 (Fe・炭少し沈着、炭物少し含む)
- 3 4と5緑灰状に混じる
- 4 10YR5/1褐色粘砂質土 (炭少し含む、炭物少し含む)
- 5 2.5Y7/8暗黄褐色砂質土 (炭少し沈着、地山)

No. 12



- 1 2.5Y6/1黄灰色粘砂質土 (炭・Fe少し沈着、灰土)
- 2 10YR4/1褐色粘砂質土 (炭物少し含む)
- 3 10YR2/1濃褐色粘砂質土 (遺構埋土)
- 4 2.5Y5/4黄褐色粘砂質土 (地山)

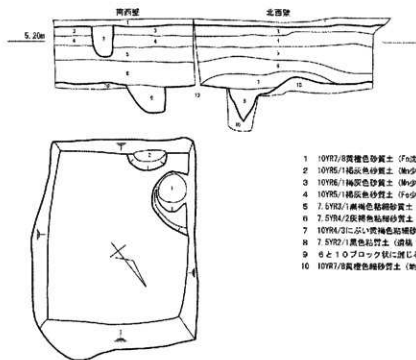
No. 14



- 1 2.5Y7/1灰白色砂質土と5緑灰状に混じる
- 2 5Y6/1灰色粘砂質土と3混じる (遺構埋土)
- 3 10YR5/1褐色粘砂質土 (炭沈着、炭含む、遺構埋土)
- 4 3と5混じる (遺構埋土)
- 5 2.5Y6/8暗黄褐色粘砂質土 (炭少し・Fe沈着、地山)

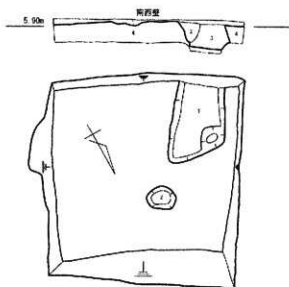
調査区平面・層序図

No. 15



- 1 10YR7/8黄褐色砂質土 (Fe沈着、灰土)
- 2 10YR5/1褐灰色砂質土 (Mn少し沈着、透糞埋土)
- 3 10YR6/1褐灰色砂質土 (Mn少し沈着)
- 4 10YR5/1褐灰色砂質土 (Fe少し、Mn沈着、遺物含む)
- 5 7.5YR2/1黄褐色粘細砂質土 (Mn沈着)
- 6 7.5YR4/2灰褐色粘細砂質土
- 7 10YR4/0に多い灰褐色粘細砂質土
- 8 7.5YR2/1黄褐色粘質土 (遺物1埋土)
- 9 6と1のブロック状に混じる (透糞2埋土)
- 10 10YR7/8黄褐色粘細砂質土 (地山)

No. 22



- 1 2.5Y7/1灰白色砂質土と4混じる (Fe少し沈着、灰土)
- 2 10YR6/1褐灰色砂質土 (Mn少し沈着、透糞1埋土)
- 3 10YR4/1褐色~3/1黄褐色粘細砂質土 (Mn沈着、透糞1埋土)
- 4 2.5Y6/8明黄褐色砂質土 (Mn・Fe沈着、地山)



No. 33



- 1 10YR5/8明黄褐色砂質土 (Fe沈着、灰土)
- 2 10YR5/1褐灰色砂質土 (Mn少し沈着、遺物少し含む)
- 3 10YR6/1褐灰色砂質土 (Fe少し沈着、遺物少し含む)
- 4 10YR4/1褐色粘細砂質土 (Mn・Fe少し沈着、遺物少し含む)
- 5 7.5YR3/1黄褐色粘細砂質土 (Mn沈着)
- 6 2.5Y6/8明黄褐色粘細砂質土 (Mn沈着、地山)

調査区平面・層序図

9 ^{しもなかほら} 下中原遺跡 - 8次調査 -

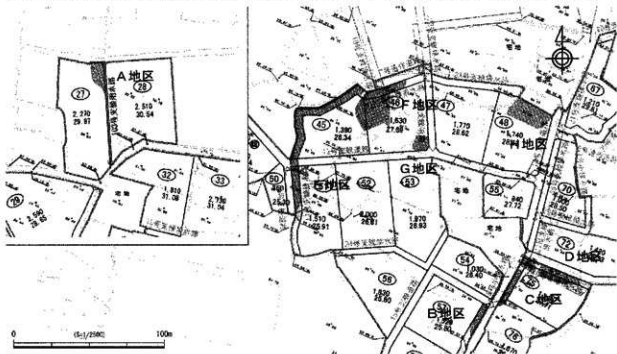
所在地 北阿万伊賀野字左市外
 事業名 基盤整備促進事業
 担当者 的崎薫
 種別 本発掘調査
 調査期間 平成19年11月7日～12月14日
 調査面積 1,379㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野の最南端に位置し、標高25.4～30.4mを測る緩斜面に立地する田園地帯である。調査はA～H地区に分けて行い、F地区で建物などの遺構を確認した。



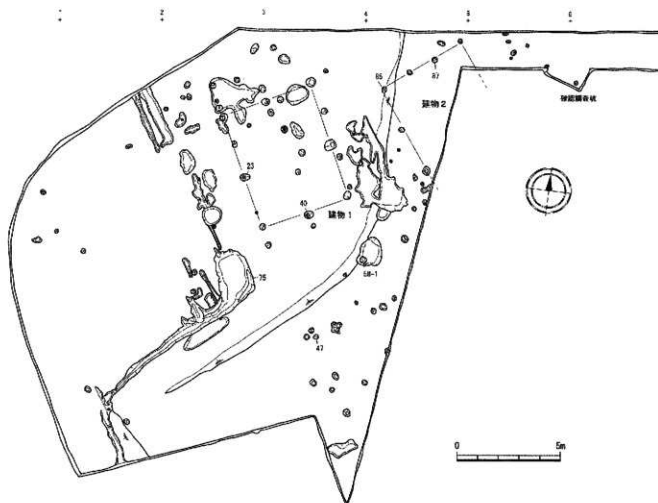
調査区設定図

【F地区】

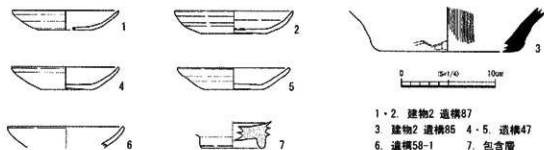
岡場面と水路部分の調査区で、374㎡の調査を行った。掘立柱建物2棟・土坑・溝などを確認した。

建物1は梁行2間×桁行2間で、梁行の1間の柱間は2.2m、桁行の柱間は2.6mと3.2mである。柱穴はやや大きめで深く、遺構23と40は柱根が残っていた。建物の柱穴や周辺の遺構埋土には焼土塊が含まれているものが多い。建物2は2間以上×3間の建物で、建物1とは主軸の方向が異なっている。1間の柱間は1.5mと2.2mで、柱穴は建物1より小さい。柱穴から土師質土器皿(1・2)や備前焼播鉢(3)が出土しているが、焼土塊は含まれていない。建物1・2とも室町時代の範疇であるが、遺物が少ないため明確な時期差は不明である。

その他の遺構では、遺構75は浅い溝で、焼土塊が含まれることから建物1と同時期である。包含層からは輸入青磁(7)が出土している。



F地区 平面図



- 1・2. 建物2 遺構87
 3. 建物2 遺構85 4・5. 遺構47
 6. 遺構58-1 7. 包含層

F地区 出土遺物

2 まとめ

今までの調査成果で、下中原遺跡は室町時代以降に拓けた集落であり、数軒の家が小規模な集落として田圃の中に点在し、その形態は現代も続いていることがわかっている。今回の調査でも、今までと同様に、室町時代の小規模な集落を確認した。建物が確認できたのはF地区のみであるが、確認調査成果も合わせて考えると、A地区南東・C地区東・E地区周辺に建物が建っていた可能性が考えられる。

下中原遺跡だけでなく、このように中世以降に拓けた地域には、小規模集落が点在している傾向が多いと考えられる。

(的崎)

10 上久保遺跡 - 3次調査 -

所在地	賀集野田字上久保外
事業名	市道野田牛内線道路改良事業
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成19年11月20日～平成20年1月5日
調査面積	約850㎡



調査の位置

1 調査内容

調査地は牛内川の左岸から南に約100m、段丘直下の低平な地形に位置する。調査地の南約500mに横穴式石室を有する野田山古墳、南約200mには奈良時代の遺物散布地である野田遺跡が立地する。

平成14年度に行われた確認調査の結果に基づいて、平成16年度に事業地の買収が先に進んだA・B地区で本発掘調査（2次調査）が行われ、中世の建物群等が検出されている。（『南あわじ市埋蔵文化財発掘調査年報1』南あわじ市教育委員会2008）今回は残りのC～E地区の調査を行うことになった。

【C地区】

約260㎡の調査区である。遺構面が一部2面に分かれていた。2面とも調査区北側に遺構が偏在する。

第1遺構面の遺構314から出土した4は、変形タイプの上製煮炊具（岡田章一・長谷川眞『兵庫津遺跡出土の上製煮炊具』『兵庫県埋蔵文化財研究紀要3』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2003）で15世紀後半頃と思われる。

第2遺構面の遺構からは1～3・5・6等の遺物が出土しており、詳細な時期は不明であるが13世紀後半～14世紀頃と思われる。

【D地区】

約450㎡の調査区である。調査区中央付近に遺構が偏在する。

遺構361は流路であるが、南東側が深く土坑状を呈している。白磁皿（11）や13世紀後半～14世紀頃と思われる土師器皿・小皿（7～10）が出土している。

【E地区】

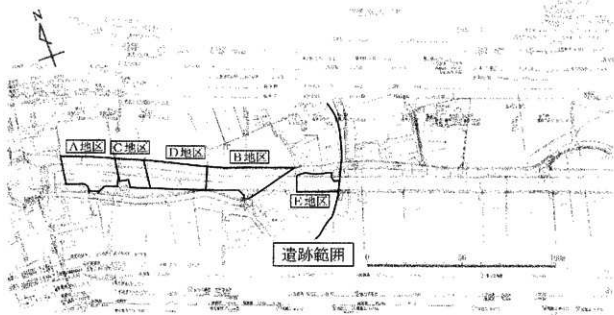
約140㎡の調査区である。地区南東端が段丘面となっており、この段丘面が遺跡範囲の境界になっている。

調査区の制約のため正確な規模は不明であるが1×1間の掘立柱建物を3棟検出した。出土遺物が少なく時期不明であるが、B地区の建物群と同じような方位であることから15世紀後半～16世紀頃と思われる。

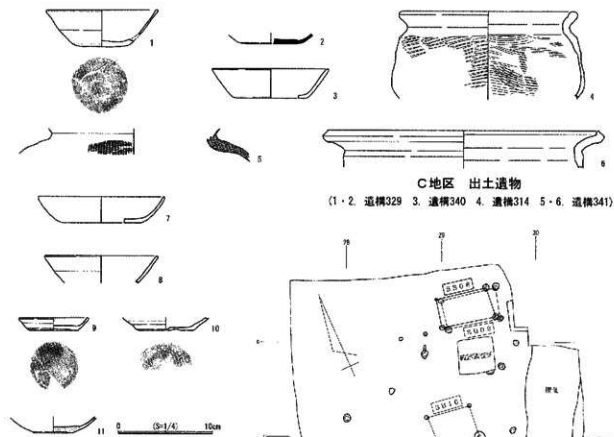
2 まとめ

2次調査のA・B地区と比べると、遺構分布は疎らである。A・B地区では2×3間の建物がそれぞれ1・3棟検出されたが、今回の調査区は屋敷地の周縁部と思われる。

土師器皿・小皿の編年が確立していないため詳細な時期は不明であるが、C地区第1遺構面とE地区がおよそ15世紀後半～16世紀頃、C地区第2遺構面とD地区が13世紀後半～14世紀頃と思われる。（山崎）



調査区設定図



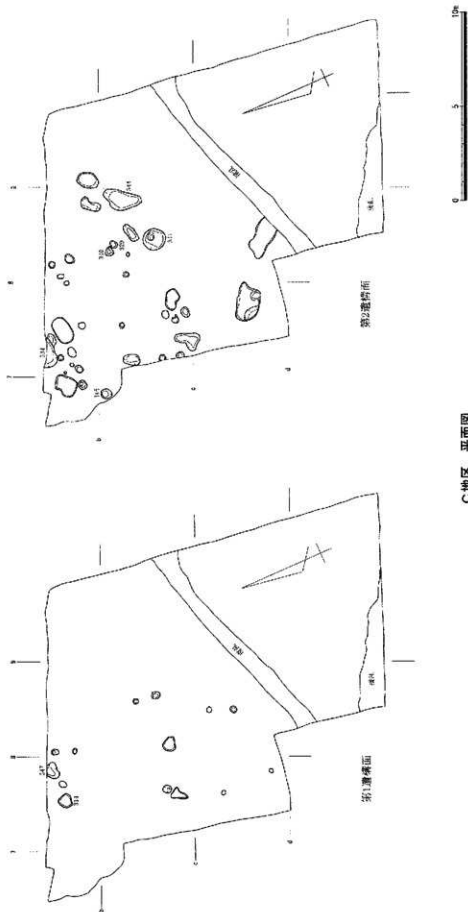
C地区 出土遺物

(1・2 遺構329 3. 遺構340 4. 遺構314 5・6. 遺構341)

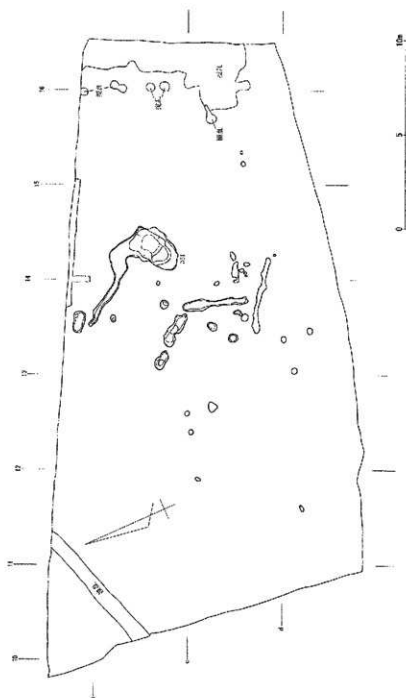
D地区 出土遺物

(7~11. 遺構361)

E地区 平面図



C地区平面图



D地区 平面图

11 あわじこくがんに
淡路国分寺跡 -17次調査-

所在地 八木園分字寺ノ内外
 事業名 特定環境保全公共下水道事業
 担当者 坂口弘貴
 種別 立会調査
 調査期間 平成19年12月3日～14日
 調査面積 62.6㎡



調査の位置

1 調査内容

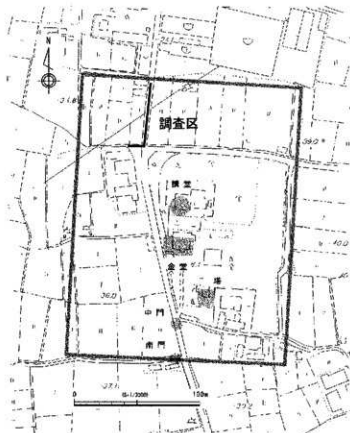
本調査は、八木園分所在の淡路国分寺跡内で計画されている下水道の配管工事に伴う立会調査である。

調査地は、三原平野中央東よりの標高約37mを測る道路部分からなる。調査は幅約0.9m×長さ約68mの下水管掘削の際、可能な範囲で遺物の採集、壁面・床面の精査後、写真・図面記録作業を行っていった。作業は、南北方向の調査区をA地区、東西方向の調査区をB地区としてその中を5m間隔に区分して進めていった。

調査の結果、現在の道路下約40cmにある礫混褐色土(10層)～礫混にぶい黄褐色土(11層)の土壌中に須恵器・土師器・瓦など古代の遺物が含まれていることがわかった。全体的に調査区北端と西端は遺物量が少ないが、A7区(SX14)周辺には土器が多く、A10～11区の少し広がっている周辺とB1・2区のSD22周辺には瓦が多い傾向にある。A7区周辺に土器が多いのは、15次調査(確認No.36)と同じ様な状況で、この周辺に僧房などの施設が想定される。

調査区でいくつか遺構を確認しているものの、調査区幅が狭く明確でないが、A8～9区のP18・19・20の間隔が2.4m前後となることから、古代の建物柱穴になる可能性が高い(SB1)。またA7区のSK13は、古代の遺物を含む礫混にぶい黄褐色土(11層)上面が遺構面となり、出土遺物も若干新しい古代末～中世初め頃に位置付けできる。

出土した軒瓦は合計4点(軒丸瓦2点、軒平瓦2点)あり、いずれも創建期の資料である。この内27はA11区から

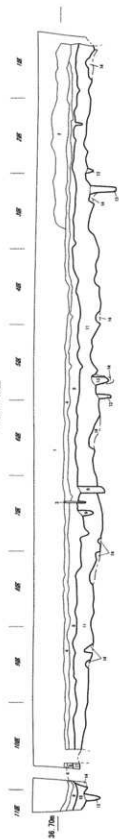


調査区設定図

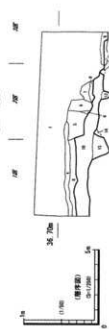
符号	出土地点	型式	点数
25	B1区 10層	SMK01(5型?)	1
-	A2区 11層	※丸瓦(形式不明)	1
26	A4区 1-4-8層	SK1102(4型)	1
27	A11区 10層	SK1110(5型)	1

軒瓦一覧表(型式名は『国分遺跡』2004による)

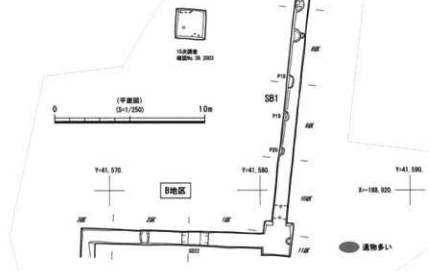
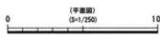
A地区 横型



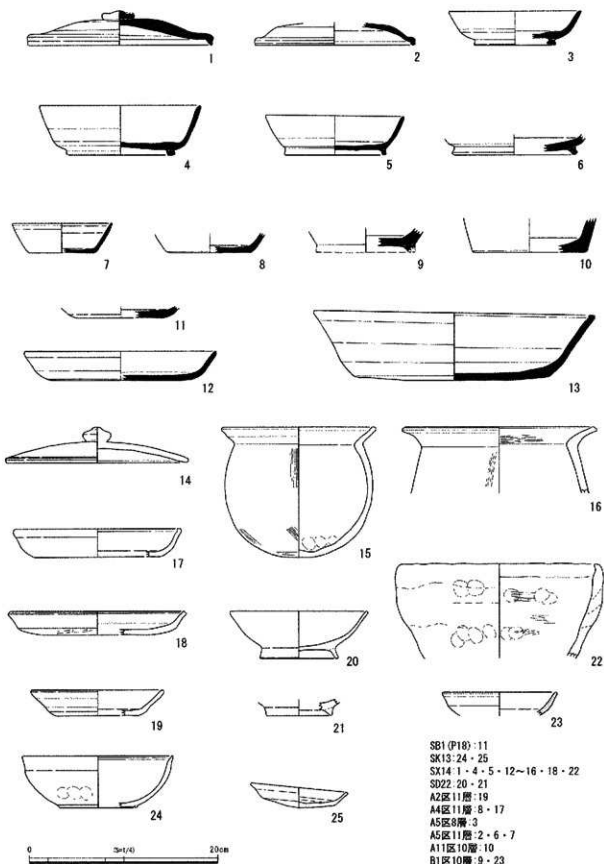
B地区 縦型



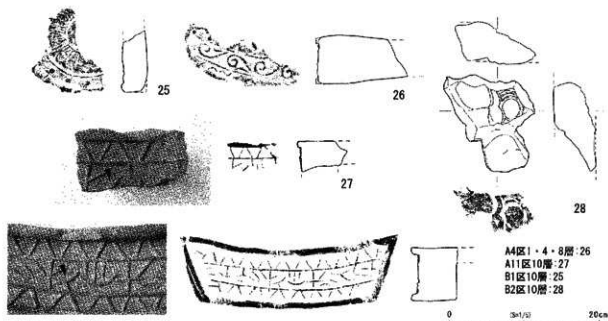
- 1 調査地
2 4M/5
3 10P/3
4 10P/2
5 10P/1
6 25M/4
7 25M/3
8 25M/2
9 25M/1
10 10P/4
11 10P/3
12 10P/2
13 10P/1
14 2.5P/6
- 1 調査地
2 4M/5
3 10P/3
4 10P/2
5 10P/1
6 25M/4
7 25M/3
8 25M/2
9 25M/1
10 10P/4
11 10P/3
12 10P/2
13 10P/1
14 2.5P/6
- 1 調査地
2 4M/5
3 10P/3
4 10P/2
5 10P/1
6 25M/4
7 25M/3
8 25M/2
9 25M/1
10 10P/4
11 10P/3
12 10P/2
13 10P/1
14 2.5P/6



調査区平面・層序図



出土遺物 1



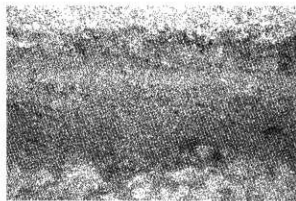
参考資料 (SKH10型式 a類)

出土遺物 2

出土した軒平瓦 (SKH10 型式) の中心飾り周辺の資料である。SKH10 型式はこれまで本資料を含め国分寺から 4 点、国分遺跡 (SBH10 型式) で 1 点の合計 5 点が確認されており、これらの資料を再確認したところ、向かって中心飾り左側の范傷の有無で細分できる可能性が出てきた (ここでは范傷がないものを a 類、あるものを b 類とする)。また范傷がない a 類は周縁が高く約 1cm、范傷がある b 類は 0.5cm 前後と低くなる傾向があり、他の資料では瓦当面に布目痕が残るものが見立つ。

2 まとめ

本調査により、調査面積と時間的制約から全体的なことは把握しにくい、古代と中世初め頃の遺構・遺物を確認することができた。特に A 7 区周辺から出土した土器は、これまで報告例が少ない淡路国分寺創建期 (奈良時代後半頃) の資料に位置付けできよう。また古代の遺物包含層上面で確認した 13 世紀を前後する遺構・遺物については、西側に隣接する国分遺跡の集落の拡大期と重なり、一次講堂廃絶以後、国分寺の寺域内においても集落が展開していったことを示す資料と考えられる。(坂口)



東壁層序 (A7 区 SX14 周辺)



出土遺物

12 大野遺跡 — 2次調査 —

所在地	賀集八幡寺梅原外
事業名	基盤整備促進事業
担当者	定松佳重
種別	本発掘調査
調査期間	平成19年12月10日～ 平成20年1月18日
調査面積	504.7㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野南西部の標高14.0～14.3mを測る田圃地帯である。

周辺には西に弥生時代～近世の岸ノ上遺跡、南西には弥生・平安時代～近世の護国寺東遺跡、平安時代～近世の護国寺跡、南辺山頂上には弥生時代の高地性集落である西山遺跡と平安時代の南辺寺古堂跡、南には古墳～室町時代の平松遺跡、北には奈良～平安時代の石ヶ坪遺跡、弥生・奈良・平安時代の線ヶ測遺跡が立地する。

上記事業に伴って行った遺跡範囲確認調査で奈良～平安時代の遺構・遺物を確認し、事業実施により破壊される箇所について本発掘調査を行い記録保存することとなった。

調査区東部は東に隣接する南池に続く傾斜で、砂礫やシルトが堆積しており10世紀前半の土器を含む。この肩部より同時期の土師器甕が復原可能な大きさで出土している。

溝84・125 平行に東西に走る溝で、埋土から併存していたと考えられる。溝間は約4m、深さ6～13cmと非常に浅く、道路遺構に伴う溝とも考えられるが不明である。ただし、切り合いや出土遺物から建物6と併存すると思われる。

溝244 深さ65cmをはかり、区画溝と考えられる。レベル的には調査区東に位置する南池より西に水が流れる。しかし、部分的に砂礫の堆積が僅かであったのみで、常時水流があったようではない。埋土上・中層には中世の遺物を含むが下層は8世紀前半の遺物のみで、建物1・2・4・6のいずれかに付随していたと思われる。

遺構118の東側で床面清掃中に遺構とはいいがたいかなり小規模な穴から、サヌカイト剥片が立った状態で出土した。加工痕は見当たらず、剥片を得るための初期工程のものと思われる。

建物1 2×2間。大型の柱穴で、製塩土器（丸底IV a 式）片を非常に多く含む。

建物2 2×2間。北側に近接棟持柱を持つ。8世紀の須恵器片出土。

建物3 3×1間以上。製塩土器片を含む。

建物4 2×2間。すべての柱穴が製塩土器片を非常に多く含む。8世紀の須恵器環Aや蓋が出土。

建物7 3×2間。北側の側柱が変則である。黒色土器A類が出土。

建物11 3×2間。中央の柱間は狭い。13世紀後半～14世紀前半の羽釜出土。

2 まとめ

本遺跡には飛鳥時代・奈良時代前半・平安時代中期・鎌倉時代後半の遺構があることがわかった。

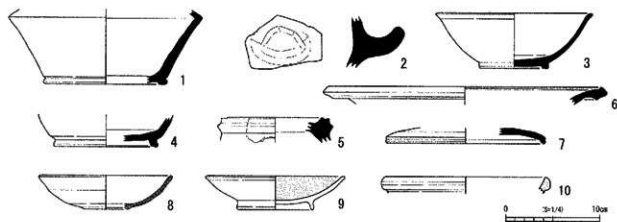
この調査区では弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物は僅かながら出土している。南池南東では分布調査で土器片を多く採集していることから、弥生時代の遺構がその周辺に包蔵されている可能性が高い。

建物1・2・3（飛鳥時代）→建物4・5→建物6（奈良時代前半）→建物7・8→建物9（平安時代中期）→建物10→建物11（鎌倉時代後半）となる。

緑釉陶器片は遺物包含層からが3点、遺構（77・182・230）から3点出土した。また、包含層より円面硯も出土しており、本遺跡を官衙遺跡として特徴づける出土遺物である。しかし、中世になると煮炊具である羽釜などの生活雑器の出土がみられ、一般集落へと変化している。

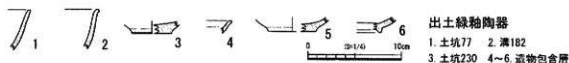
掘立柱建物の柱穴からは非常に多くの製塩土器（丸底IV a 式）が出土した（丸底IV a・b式については本書「岸ノ上遺跡3次調査」を参照）。製塩土器はその上層には含まれないことから、遺構自体への混入が考えられる。平安時代中期の遺構にも製塩土器片は含まれるが、奈良時代の遺構ほどではない。製塩土器片は初級痕が認められるものが多く、ほとんどが小片化している。しかし、本遺跡からも西に立地し同じ製塩土器（丸底IV a 式）が出土している岸ノ上遺跡でも、製塩土器を用いた塩生産の痕跡は確認できていない。ごみ穴のような廃棄土坑や遺物包含層からではない出土状況から、生産・消費ではなく集散によるものと思われ、総柱建物が主となる掘立柱建物群で構成される岸ノ上遺跡は物資の保管施設、側柱建物が主となり円面硯が出土した本遺跡は管理施設と考えられる。

平城京では761年銘の「阿万郷」から塩を運んだという木簡が出土しており、阿万地域で作られた塩を大日川とその支流の山路川を利用して運搬するために、両河川沿いには塩集散に関連する施設が置かれていた可能性が考えられる。約1km北に立地する線ヶ淵遺跡は8世紀初頭の郡衙関連遺跡であるが、遺跡の西に流れる大日川を利用した塩の集散地と考えられ、山路川沿いには官衙的性格が強い石ヶ坪遺跡や平松遺跡が立地する。以上のことから本遺跡も塩の集散の一端を担っていたと推測する。（定松）



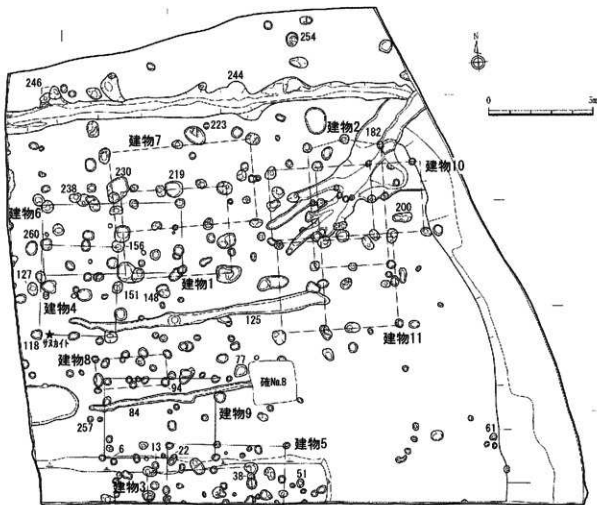
包含層出土土器

1~7. 須恵器 8. 瓦器 9. 黒色土器 10. 白磁

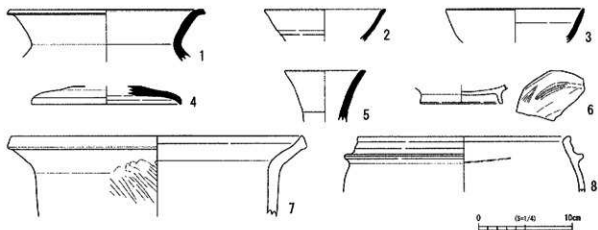


出土緑釉陶器

1. 土坑77 2. 溝182
3. 土坑230 4~6. 遺物包含層

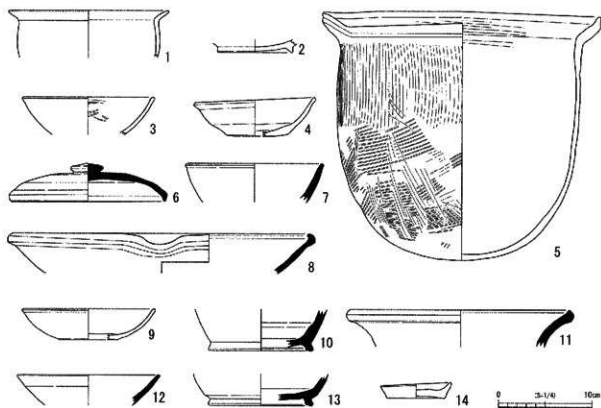


平面图



建物別出土土器

1~4. 建物1 5・6. 建物7 7. 建物9 8. 建物11



出土土器

1. 土坑13 2. 柱穴22 3. 土坑38 4. 土坑51 5. 土坑61 6. 土坑148 7. 柱穴151
8. 土坑200 9. 土坑223 10·11. 溝244 12. 土坑254 13. 土坑257 14. 土坑260



製塩土器

1. 土坑6 2. 土坑246 3. 柱穴94 4. 土坑127 5·6. 柱穴156 7. 土坑238



出土石器

- 1·2. ★印 3. 柱穴219

2011年3月18日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報IV
2007年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衛1100

TEL 0799-42-3849

印刷 淡路印刷株式会社

〒656-0121 兵庫県南あわじ市山添168-5

TEL 0799-45-1323